滋賀県立琵琶湖博物館　第三次中長期基本計画
令和３年度事業評価報告書

滋賀県立琵琶湖博物館
令和５年２月

目次

1　第三次中長期基本計画に基づいた事業計画と評価
1-A　計画の進め方　1
1-B　令和２年度（2020 年度）に計画された重点事業の計画　2

2　評価の実施方法
2-A　評価実施の流れとスケジュール　10
2-B　内部評価について　10
2-C　外部評価について　10

3　内部評価　12

4　外部評価　19

5　事業計画の見直し　36

1　第三次中長期基本計画に基づいた事業計画と評価

1-A　計画の進め方

平成８（1996）年に開館した滋賀県立琵琶湖博物館は、「湖と人間」をテーマに活動をしてきました。これまでに、その使命や基本理念に沿って計画的に発展していくために、２つの中長期基本計画を策定して事業を進めてきました。令和２（2020）年度末には次の計画として第三次中長期基本計画「出あい、学びあい、琵琶湖を世界へ発信する博物館」を策定し、令和３（2021）年度からそれに沿った重点事業を中心に活動をはじめました。

第三次中長期基本計画は、10 年後の社会の姿として「多くの人が琵琶湖とともに生きることの価値を感じることができ、その幸せが将来にわたって継承されていく社会。誰もが日常の中で、湖との暮らしのより良いあり方を探求・実践でき、その成果を多くの人と共有する機会を持っています。また、さまざまな人びとが出会い、学び会うことで新たな発見や活動の持続が可能になっています。」としています。このような社会の姿に向けた琵琶湖博物館の役割を担うために必要な事業目標として、6 つの事業目標を設定しています。また、それら６つの目標を目指すために、各事業目標には２つないし３つの重点事業を設定し、当面５年間に実施する事業計画を立てています。

最終的に目指す目標に向けて行う事業計画は、博物館をとりまくさまざまな状況によって、当初たてた計画通りに進まないことが考えられます。そのために、各事業の計画については、さまざまな状況から常に見直しをすることが必要です。第三次中長期基本計画に基づく５年間の重点事業計画については、その年度における進捗状況の確認と評価を博物館が行い（内部評価）、その評価について滋賀県立琵琶湖博物館協議会（以下、博物館協議会）委員による評価（外部評価）を行っていただくことで、評価対象とした年度以降の重点事業の計画を見直すことで、目標に向かった事業が実施できているかを確認しながら進めます。

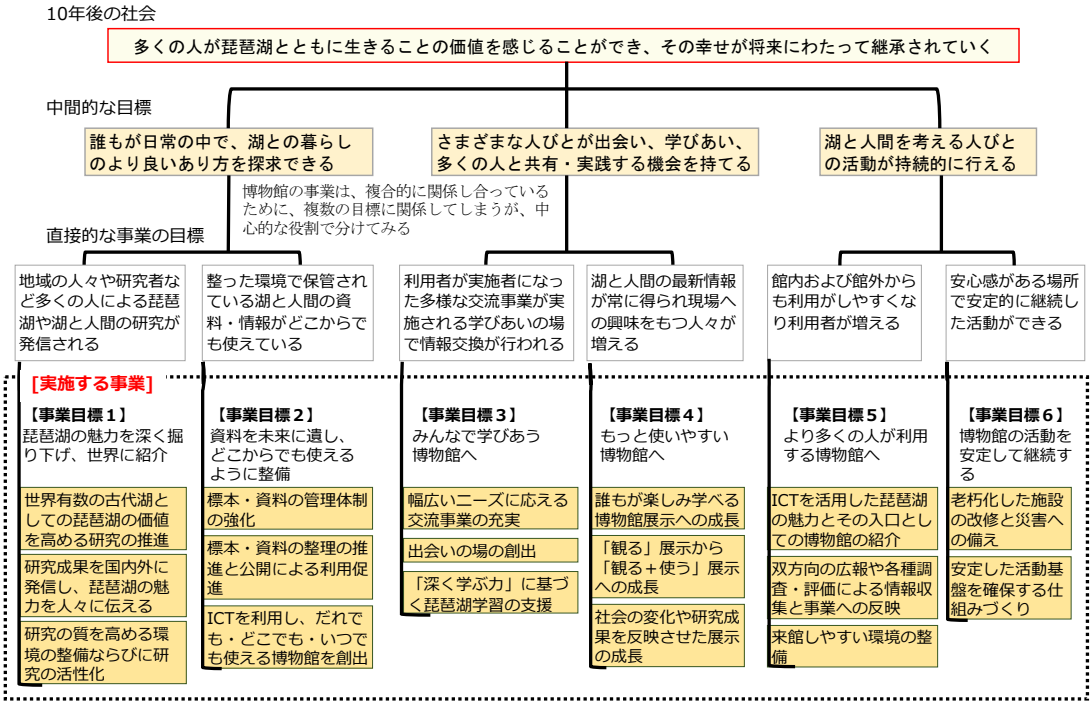

図　第三次中長期基本計画の目標へ向けた考え方の筋道

1-B　令和 2 年度（2020 年度）に計画された重点事業の計画

第三次中長期基本計画は、令和２年度末に計画され、重点事業についての計画は、令和３年度から５年間について計画されました。令和２年度末の計画を以下に示します。

○事業目標１　琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

・実施目標：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。

・評価指標：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

1-1. 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

・5 年間の事業：既存の研究プロジェクトのとりまとめと新しい複合分野の研究プロジェクトの立ち上げを進める。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	各年次報告書提出	総合研究・基盤Ｂ研究の推進 次期総合研究の検討開始
2022	基盤 B 最終報告書提出	総合研究の推進 基盤 B 研究のとりまとめ 次期総合研究の内容・体制の検討
2023	総合研究最終報告書提出	総研「過去 150 年」とりまとめ 次期総合研究の研究計画調書提出
2024	新総合研究年次報告書提出	新総合研究の立ち上げ
2025	館内において複合分野の研究プロジェクトが企画、実施されている。	新総合研究の実施

1-2. 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

・5 年間の事業：ウェブを中心とした新たな研究発信方法の構築とコンテンツの充実をはかる。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	リサーチマップの掲出と更新	既存の枠組みでのウェブ発信
2022	J-stage への研究調査報告掲載	J-stage への研究報告書掲載手続き
2023	コンテンツ案策定	ウェブ掲載コンテンツの検討
2024	新コンテンツのウェブ掲載	新コンテンツのウェブ掲載
2025	琵琶湖地域に関する研究成果が、ウェブを中心として適切な媒体によって国内外に発信されている。	新コンテンツの改良

1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

・5 年間の事業：耐用年数を超えたり故障した研究備品を更新し、共同利用を推進する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	最新の備品更新計画策定	備品更新計画の更新。既存の施設備品による研究推進

2022	備品調達方法のリストアップ	備品調達方法の検討。既存の施設備品による研究拠点形成の検討
2023	備品調達方法の改善。既存の施設備品による研究成果の公開	備品調達の試行。既存の施設備品による研究拠点形成
2024	大型備品の確保	必要備品(電子顕微鏡や調査船)の確保。既存の施設備品による共同利用の推進
2025	琵琶湖研究に必要な研究設備が整備される	新規購入備品を使った研究の促進。共同利用の推進

〇事業目標２　資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

・実施目標：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICT を活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

・評価指標：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

2-1. 標本・資料の管理体制の強化

・5年間の事業:開館から25年が経過し収蔵庫の保管環境や作業環境が悪化しているため、計画的に改善を図るとともに、IPMによる管理体制を強化する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	収蔵庫空間の設備の不具合の原因が把握できている	収蔵庫空間の電気、空調、排水設備等の故障や老朽化の情報集約。民俗収蔵庫１の雨漏りの原因究明と修繕。
2022	問題のある設備改修の予算申請の年次計画を立案	収蔵庫空間の電気、空調、排水設備等の故障や老朽化の一斉点検。収蔵庫空調用冷水バルブ修理／蛍光灯の安定器故障による照明器具の LED 改修予算の要求
2023	収蔵庫空間の IPM 体制の問題点が把握できている。環境改善に向けた予算申請。改修工事により改善された環境	予算がついたものの改修工事。積み残しの問題のある設備改修の予算申請。IPM 体制の問題点の情報集約。
2024	IPM 体制の改善。改修工事により改善された環境。環境改善に向けた予算申請。	予算がついたものの改修工事。積み残しの問題のある設備改修の予算申請。IPM 体制の改善案を検討。
2025	再構築された IPM により定期的な管理体制が確立する。改修工事により改善された環境。環境改善に向けた予算申請	予算がついたものの改修工事。積み残しの問題のある設備改修の予算申請。収蔵庫環境の管理体制の構築。

2-2. 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

・5 年間の事業：従来より進めてきた収蔵品データベースへのデータ入力を引き続き行うとともに、画像データが付加されたより魅力的なデータベースとなる。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	ウェブ公開データベースの充実に向けたデータ入力が進む	緊急雇用による資料撮影と新規登録
2022	ウェブ公開データベースの充実に向けたデータ入力が進む	資料写真整理体制の検討
2023	資料写真整理とデータベースへの登録が進む。ウェブ公開のための体制が整備される	資料写真整理体制の整備 データベース編集作業、データベース画面デザイン、博物館ウェブページとの調整
2024	データベース運営における問題点の抽出と改善方法の検討	データベース運営における問題点の検討
2025	データベースがスムーズに運営されている	データベース運営における問題点の改善

2-3. ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

・5 年間の事業：リニューアル後の常設展示資料情報に対応したウェブ図鑑の公開を進める

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	写場の設備計画の立案 多面的な音声ガイド情報が公開	写場の設備の現状把握 多面的な音声ガイド情報の整備
2022	写場の設備が整えられている ウェブ図鑑の構築に向けた資料の画像情報の蓄積が進む	写場の設備を更新 ウェブ図鑑の構築に向けた資料の画像情報の蓄積
2023	ウェブ図鑑の構築に向けた資料の画像情報の蓄積が進む	リニューアル後の常設展示資料情報の整理
2024	ウェブ図鑑の構築に向けた資料の画像情報の蓄積が進む	リニューアル後の常設展示資料情報の公開における問題点の検討
2025	リニューアル後の常設展示資料情報と連携したウェブ図鑑の公開	リニューアル後の常設展示資料情報の公開における問題点の改善

〇事業目標３　みんなで学びあう博物館へ

・実施目標：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。

・評価指標：利用者が実施者になった多様な交流事業が実施される学びあいの場で情報交換が行われる

3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実

・5 年間の事業：利用者との対話を通じて交流事業のニーズを確認しながらメニューの充実を図る。また、交流事業の実施者の多様化を促進する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	琵琶湖博物館全体の交流事業の現状が把握される。	これまでの交流事業の実績を他の係の実施分も含めて整理し、現情を把握する
2022	交流事業の充実のための計画や方針が策定される。	博物館が提供できる（すべき）交流事業の候補をリスト化し、さらにびわフェス等でニーズの確認を行う。その結果をもとに交流事業の充実のための方針を策定する
2023	計画的なメニューの充実が進むとともに、実施者の多様化も進む	交流事業の充実のため、学芸職員やはしかけ、外部団体等に声かけや相談をしてメニュー作りを進める。また継続的にニーズ調査を行う
2024	計画的なメニューの充実が進むとともに、実施者の多様化も進む	交流事業の充実のため、学芸職員やはしかけ、外部団体等に声かけや相談をしてメニュー作りを進める。また継続的にニーズ調査を行う
2025	交流事業が充実するとともに、実施者も多様化する。	館内外の人びとと共に、これまで 5 年間の交流事業の実践を検証する

3-2. 出会いの場の創出

・5 年間の事業：フィールドレポーター制度やはしかけ制度およびそれらの出会い・発表の場であるびわ博フェスを基盤に、参加する層を拡充し多様性を高めることで目標を実現する。最初の 5 年間は団体・企業当の参入を促すため団体向けのはしかけ制度的なものを作る。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	登録制度の概要についての整理	団体向け登録制度に関する情報収集
2022	制度運営に必要な要項等の整備	団体向け登録制度発足の準備
2023	登録開始、利用実績作り。拡大びわ博フェス開始	団体向け登録制度の開始。びわ博フェスへの団体の参加
2024	登録団体の拡充と利用実績の増大。拡大びわ博フェス	団体の勧誘。びわ博フェスの計画・運営方式の検討
2025	さまざまな個人と団体が博物館を利用して活動を行い、人々の出会いの機会が増加している	交流状況についての効果測定とまとめ

3-3.「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

・5 年間の事業：「深く学ぶ力」による学習では体験が重視されるが、琵琶湖学習においては教師自身の「体験」の機会が少なく有効な教材を生み出しにくい問題がある。この問題を解消するため、研修によって教師自身の「体験」を支援する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	教師が「体験」的な教材を生み出すために役立つ研修の構築	研修内容の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集

2022	受講者の意識向上を指標に改良された研修の実施	研修の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集
2023	受講者の意識向上を指標に改良された研修の実施	研修の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集
2024	受講者の意識向上を指標に改良された研修の実施	研修の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集
2025	教員が体験的な教材を主体的に生み出せる教員研修の確立	研修の継続的な実施。研修の成果まとめ

〇事業目標４　もっと使いやすい博物館へ

・実施目標：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます。

・評価指標：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

・5 年間の事業：視覚障害者と外国語使用者への対応として音声ガイドを導入したが、その性能上、一部の展示しかカバーできていない。最初の 5 年間はこの問題に取り組むこととし、可能な限り多くの展示へのアクセシビリティを確保するため、新たな ICT 技術を用いたガイド手法を導入する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	採用する手法の候補が決まる	ガイド手法についての情報収集
2022	展示室においてテストが行われ、実現性や課題が明らかになる	ガイド手法の試行
2023	新しい手法によるガイドの数が増え、その効果についての検討が行えるようになる	新しい方法に合わせた展示解説の作成と配置開始
2024	効果測定に基づく改良と解説項目の増加が進む	解説の追加・改良
2025	常設展示室の展示の大半に解説がつき、アクセシビリティが向上する。	解説の追加、改良。利用者による評価

4-2.「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長

・5 年間の事業：展示室から現場の情報にアクセスすることでより展示を楽しむ仕組みを、インターネットの利用により実現する。外部から展示室を利用する方法については重点事業 5-1 で展開し、6 年目以降に両者を活かしたプログラム作りを進める。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	方法の検討と小規模な試行	方法の検討と小規模な試行
2022	展示から現場の情報・より詳しい情報をとりに行く行動を促す仕組みについて情報が得られる。	博物館から現場の情報を取得する仕組みを一部の展示を使って試す
2023	展示から現場の情報・より詳しい情報をとりに行く行動を促す仕組みが強化され	博物館から現場の情報を取得する仕組みを試す範囲を拡げる

	る。	
2024	展示室から外の情報にアクセスすることでより展示を楽む利用方法が来館者に認知されるようになる。	博物館から現場の情報を取得する楽しみについての PR
2025	展示室と現場をつなぐ楽しみ方の認知が広がり、一般に利用されるようになっている。	仕組みの充実

4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

・5 年間の事業：常設展示の情報の見直しと修正を、リニューアルが終了した時期の早いものから順次進め、5 年間で一通りの更新を実施する

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	C 展・水族の更新計画	C 展・水族の更新計画を策定
2022	Ｃ展示・水族展示の更新の一部実現。大型更新のための予算要求提出	経常予算でのＣ展示・水族展示の更新。予算措置が必要な更新の予算編成
2023	C 展示・水族展示の更新が完了。A 展・B 展の更新計画	C 展示・水族展示の大型更新の実施。A 展・B 展の更新計画を策定
2024	A 展示・B 展示の更新の一部実現。大型更新のための予算要求提出	経常予算での A 展示・B 展示の更新。予算措置が必要な更新の予算編成
2025	A 展示・B 展示の更新が完了し、常設展示の更新の 1 サイクル目が終了している。	A 展・B 展の大型展示更新。次のサイクルの進め方の検討

〇事業目標５　より多くの人が利用する博物館へ

・実施目標：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。

・評価指標：館内および館外からも利用がしやすくなり利用者が増える

5-1. ICT を活用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

・5 年間の事業：ウェブサイトを「もう一つの琵琶湖博物館」（バーチャルミュージアム）と位置づけ、サイトだけでも琵琶湖（湖と人間）について学べるように情報を発信する。また、展示室のようすや展示解説も掲載し、疑似的な来館を実現する。最初の 5 年間は枠組みづくりを中心に進める。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	発信計画の素案ができる。ウェブサイト改良の第一段階が終了。展示紹介動画ができ、公開される。	発信計画の検討。ウェブサイト再編成（サイト統合）。博物館紹介動画（展示概要）作成

2022	発信計画ができる。発信準備としてページの再編成が進む。	発信計画（ページ構成案）策定。ウェブサイト再編成（ページ整理）。博物館紹介動画（トピック）作成
2023	各メニューの掲載が始まる。	各ページのコンテンツ作成、掲載開始。琵琶湖紹介動画の計画。アクセス解析開始。
2024	アクセス解析により、アクセスを増やすためのルート改善が進む。	アクセス解析およびページの改良。コンテンツ掲載継続。琵琶湖紹介動画作成
2025	ウェブサイト上で「湖と人間」について学べるようになっている。また琵琶湖博物館の疑似的な来館が可能になっている。	発信計画のみなおし。琵琶湖紹介動画アップ。アクセス解析

5-2. 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

・5 年間の事業：琵琶湖博物館の社会貢献を測定し、事業に活かせるような仕組みを運営できる組織体制を確立する

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	博物館の情況を客観的に評価するための手法、目的や指標の検討を行う	調査・評価方針の検討
2022	博物館の情況を客観的に評価するための調査・評価手法を選定する	調査・評価方針の検討
2023	調査が行われ、評価結果が出るとともに当初の目的に適合するかどうかの検討が行われる	調査の実施
2024	必要に応じて改善された調査が行われる	調査の継続実施（改善含む）
2025	調査評価の方法が確立し、博物館の情況を客観的に示せるようになっている	調査の継続実施（改善含む）

5-3. 来館しやすい環境の整備

・5 年間の事業：予約システムによる来館者の分散は 2020・21 年度実績より現実的でないと判断。キャッシュレス・チケットレス環境は前倒しの整備となったため、2022 年度をもって終了予定。ほかに想定される、多言語対応やユニバーサルデザインの推進は事業目標４にて実施する。公共交通機関の充実については、前中長期計画の取組結果より、期間を区切って結果を達成するのは極めて困難と判断し、継続的に模索するものの、重点事業化はしない。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021		予約システムの活用方法の検討 キャッシュレス・チケットレスの導入
2022	キャッシュレス・チケットレス導入による利便性の向上	利用実績に基づくキャッシュレス・チケットレスの対象会社の拡張
2023		

2024		
2025		

〇事業目標６　博物館の活動を安定して継続する

・実施目標：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます。

・評価指標：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

6-1．老朽化した施設の改修と災害への備え

・5 年間の事業：「災害に強い」を重視し、災害に耐えられるような資料の保管環境を実現する改修を優先的に進めるとともに、危機管理体制の見直しを行う。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	改修・危機管理の改善に向けた準備	改修更新個所の洗い出しと分類。危機管理項目の頭出しと既存マニュアルの再収集・整理
2022	改修更新計画。危機管理マニュアル	建物・施設改修更新計画完成。危機管理管理マニュアル統合版完成
2023	施設改修の進捗。危機管理体制整備の進捗	標本・資料の保管環境整備開始。危機管理のための体制整備着手、訓練・研修計画作成。
2024	施設改修の進捗。危機管理体制整備の進捗	標本・資料の保管環境整備継続。建物関係の改修・更新開始。マニュアルに基づく訓練・研修
2025	計画に基づいた建物・施設の改修が、優先順位の高い標本・資料の保管環境から進んでいる。危機管理マニュアルが職員に浸透している	標本・資料の保管環境整備継続。建物関係の改修・更新開始。危機管理マニュアル改訂作業開始

6-2．安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

・5 年間の事業：支援の受入制度の整備と安定化をまず実現する

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021		リニューアル後の博物館支援の受入制度の試行
2022	びわ博サポーター制度を利用しやすくするための検討が進む	支援の受入制度の課題の抽出と最適化のための検討
2023	制度の改善のために必要な行政手続きが進められる	最適化のための手続き
2024	改良された制度が始まる	支援の受入制度の運用開始
2025	企業・団体・個人等から支援を受ける仕組みが確立している	支援の受入制度の運用

2　評価の実施方法

2-A　評価実施の流れとスケジュール

各年度終了後、次年度 4 月に各事業目標について、主な担当部・課・係において評価を実施し、全体のまとめを行い、博物館の内部評価とします。令和 3 年度の内部評価については、館内のまとめを 5 月下旬に行いました。

内部評価の資料を博物館協議会の各委員へ送付し、博物館協議会にて内部評価の内容について説明、質疑を行います。その説明をうけて博物館協議会の各委員による外部評価を行います。令和 3 年度評価のための協議会は令和 4 年 7 月に実施しましたが、本協議会において外部評価を実施できる内部評価として提示されていないとの意見から、内部評価の再提出が求められました。それを受け、同年 7 月中に令和 3 年度内部評価の見直しを行い、その資料を博物館協議会の各委員に提出し、同年 8 月末日をめどに内部評価についての外部評価を実施いただきました。

博物館協議会委員による外部評価をうけ、その評価、内部評価、各事業の進捗状況、博物館状況などを考慮して、各重点事業計画の見直しを実施します。今年度は、9 月以降に事業計画の見直しを行いました。実施した事業計画の見直しについて、博物館協議会において説明を行い、意見を伺い、質疑を行います。今年度は、令和 5 年 1 月に実施しました。

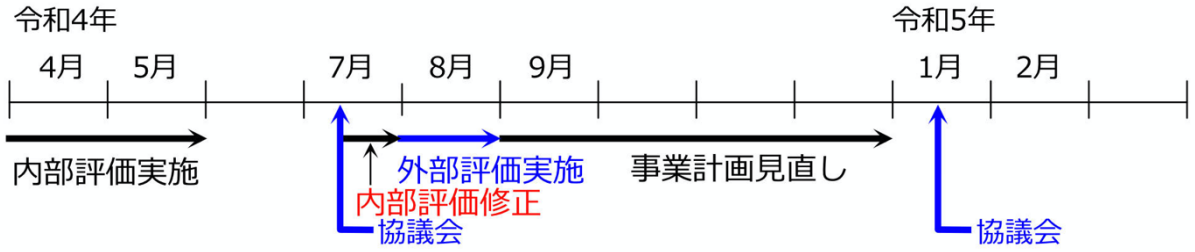

図　令和 4 年度に実施した評価および事業計画の見直しスケジュール

2-B　内部評価について

目指すべき目標に向けて計画している 6 つの事業目標について、それぞれの事業の中心的な役割を示す担当部・課・係が実施します。対象年度の重点事業の計画に対して、実施できたこと、実施できなかったことについて評価し、その内容について詳しい説明が示されている年報等の資料がある場合は、その該当部分を示します。

重点事業の計画に対してできたこととできなかったこと、今後の計画も含めて、対象の事業目標についての進み具合や今後の問題点なども含めて評価を行います。

2-C　外部評価について

次年度はじめに実施した内部評価に対する評価を、外部評価として博物館協議会委員に実施していただきます。外部評価は、琵琶湖博物館がたてた計画とそれに対する内部評価について、6 つの事業目標ごとに、その評価が妥当な評価であるかを中心に検討し、琵琶湖博物館が目指す 10 年後の目標を最終到達点として、そこに向かうために必要な実施内

容であるか計画になっているかに対して、助言や意見を述べていただきます。

令和 3 年度事業についての外部評価は、令和 4 年 7 月に行われた博物館協議会において、評価をした各委員の意見を無記名で列挙することが決定されました。そのため、事業目標ごとに、評価書を提出された順番に無記名で並べています。評価者が対象とする事業目標について特筆すべきことがない場合は、意見を述べないこともあります。なお、評価の書きぶりを統一するために、ですます調への変更や漢字の変換ミスなどの明らかな間違いについては、事務局で修正いたしました。令和 3 年度（2021 年度）の外部評価は、第 13 期滋賀県立琵琶湖博物館協議会の 15 名の委員が行いました。

3　内部評価

○内部評価　総評（館長による評価）

・内部評価

第３次中長期計画を開始して１年が経過した。本計画は６つの事業と 17 の実施事業で構成されているが、計画 10 年後の「社会目標」に到達できるよう、新たに事業目標や実施事項をより明文化するとともに、計画５年後までの行程を作成した。その結果、今後の目標や進めるべきことがより明瞭となった。

この中長期計画を進めるために最も重要なことは、博物館の資源となる資料や情報、そこからもたらされる研究成果を蓄積することである。そのことが、その成果が展開される展示や交流事業の充実にもつながる。このためには、限られた時間の中で、できるだけ質の良い時間をつくることである。この点から、事業目標１に関連して、研究・事業専念日を厳格に運用する試行ができたことは今後の計画を進捗させるために重要な改善であった。

また、国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルの無料公開システム「J-stage」に博物館の研究報告書の登録が始まったことは、博物館の研究発信能力が拡大し、活用される機会が増加することになった。

事業目標４に関連して、YouTube を活用した「びわこのちからチャンネル」や展示室でのスマートフォンを活用した「ポケット学芸員」が新たに導入され、琵琶湖の地域に興味を持つ人や展示を楽しむ事業が進展したことは評価できる。

事業目標５に関連して、キャッシュレスやチケットレスのシステムが導入できたことは、利用者に対する利便性が向上したが、発券業務には時間がかかっており今後の改善が必要である。

感染症が蔓延するなかでの中長期計画１年目となり、通常業務に加え、予約制導入を含む館内の感染症対策の実施、県庁で実施する感染症対策の応援など、負担が増加するなかで、ほぼ計画どおり、目標によっては前倒しで進めることができたことは、評価できる。今後、感染症の収束が進む中で、博物館内の充実だけではなく、地域の人々が出会い、学びあい、世界へ発信できる博物館となるような活動を着実に進めなくてはならない。

○事業目標１　琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

・実施目標：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。
・評価指標：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

・内部評価

2021 年は館内外の研究プロジェクトがのべ 85 件進行中で、精力的に研究を進めた。館内の研究プロジェクトは、毎年度に研究審査委員会による審査を受け、その内容や計画についても助言を受けながら実施をしており、当年度もその上で研究を進めた。目玉となる総合研究は明治維新以降の 150 年間の変化を総括することを目的としているが、全体の進行がやや遅れており、一層の精進が必要となっている。もう一つの目玉となっている科研費による「琵琶湖固有種の成立過程の解明」に関する研究は順調に進んでおり、2022 年度にまとめを行う予定である。これらの研究の後継となる新たな総合研究のテーマの検討は残念ながら進んでいない。

重点事業 1-2 の研究成果の情報発信力の強化と 1－3 の研究環境の整備と活性化は、初動としては十分な進展があり、年度の目標は達成できた。

全体としては 2021 年度は事業目標「琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介」を実現するための下ごしらえの年と位置付けられる。1-2 と 1-3 については 100%以上達成したが、1-1 は半分程度しか達成しておらず、その改善が課題として残った。

・各重点事業の目標と実施状況

1-1．世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

（実施状況）

2020 年 3 月に作成した工程表では、当館の総合研究や大型の科研費研究などの実施状況をもって「研究の推進」と位置付けていたが、中長期基本計画の重要な要素である「10 年後の状態」に関する想定を欠くことから、館内の内部評価で方向性が誤っているのではないかという指摘があった。このため、本重点事業については根本から再検討を行っているところである。

事業目標からあらためて 10 年後の情況（到達点）を次のように想定した

琵琶湖やその周りの暮らしの価値を発見する活動を地域が盛んに行っている

琵琶湖が世界中の研究者の注目の的となり研究プロジェクトが次々に生まれている

こうした状況を生み出すための体制の整備や、さまざまな種まきが 1-1 の本旨と考え、2022 年度に計画を再構築する。

1-2．研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

（実施状況）

琵琶湖博物館が提供する情報は当館内外の研究成果に基づいており、その緻密さや深さが面白さの源泉となっている。本重点事業は従来から行ってきた展示や書籍等を通じた成果の発信に加え、インターネットも利用してより広範囲の人々に発信を試みるものである。論文等の研究成果そのもので国内外の研究者の興味を引いて琵琶湖研究の厚みを増すとともに、一般の人向けに琵琶湖の情報を提供する「バーチャルミュージアム」の構築を企図している。

この準備として2021年は当館ウェブサイトの再構築を行い、利用者が入りやすい構造にするとともに、さまざまな情報提供のページが作れるように準備した。これにあわせて博物館の研究内容を紹介するページを加え、博物館を研究で利用する人や相談等で利用する人への便宜を図った。また、印刷物として配布していた当館の研究報告書を電子化（PDF化）し、国が主導する電子ジャーナルプラットフォームJ-Stageでの公開を開始した。公開は2022年度を予定していたが、手続きが順調に進んだため前倒しで2021年11月より公開が始まった。公開から3月までの5か月間で約4000件のアクセスがあり、従来に比べて格段に多くの人が研究報告書を利用するようになった。

一般向けの情報発信としては、当館ウェブサイト上の既存の情報を「学べる・調べる」という枠組みで再整備した。また広報関係の事業としてユーチューブに弥生時代のコメの炊き方や氷魚の紹介の動画を公開し好評を得ている。

以上のように、情報発信の強化は順調にスタートを切ることができ、予定よりもやや早めに進行している。内容の充実については、今後の検討課題である。

1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

（実施状況）

開館から四半世紀が過ぎて劣化した建物や空調などの設備の更新と、時代遅れとなった研究機器の入れ替えを10年間で達成するのがこの事業の主要な目標である。2021年は主力となる大型研究備品の向こう５年間の調達計画を作って予算申請を行い、2022年度に電子顕微鏡を購入する予算を得た。電子顕微鏡は普通の顕微鏡より細部まで観察でき、種を判定して新種を発見したり、生物の移り変わりを調べるのに使われる。その他の細かい備品類についても更新計画も策定し、予算に計上した。このように2021年は再建の最初の段階として計画的の策定とその提示を行うことができ、初年度の目標を達成したと考えている。

研究時間の質の向上については、全員一律の研究専念日（時間）を設定した。館内で行ったアンケートでは、研究がやりやすくなったという肯定的な意見が大半を占める一方で、事業部の仕事へのしわ寄せや、緊急時の連絡方法の不備などの問題が明らかになった。

○事業目標２　資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

・実施目標：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICTを活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

・評価指標：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

・内部評価

保存されている資料・情報について、それを必要とする人が利用可能な管理を行うために資料登録などの整理作業をすすめた（年報p4 － 7）。施設面では、四半世紀を経て、収蔵施設の老朽化が目立つようになってきたことから、安定的に資料・情報を保管する施設として、今後の必要な補修や改善について調査を行った。そのための予算獲得

は今後の課題である。博物館で保管している資料・情報について、より多くの人びとに使用していただくことを推進するために、資料の内容がわかりやすいように画像情報でのデータベース公開のデータ作成作業をすすめた。

令和３年度は、多くの人が使える資料・情報の保管と公開にむけて、保管環境の調査と整備計画を検討し、展示室での資料情報の発信を行い始めた段階である。現在の収蔵資料は、未整理資料も多く（年報 p4 － 7)、寄贈資料の受入も多くある（年報 p8）ことから、資料整理と資料の情報公開を着実に進めることが重要と考えている。

・各重点事業の目標と実施状況

2-1．標本・資料の管理体制の強化

（実施状況）

今後の年次計画作成の基盤となる過去の事故歴、照明の故障などを取りまとめることができた。民俗収蔵庫１の雨漏りの原因を特定し、修繕を行った。

2-2．標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

（実施状況）

緊急雇用を活用し、資料の写真撮影とデータベース登録が進展した。画像データベースの一部公開を実施できた。新たに考古資料データベースの構築をすすめ、公開のためのデータセットの作成を完了した。

2-3．ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

（実施状況）

写場にすでにある撮影機材（カメラ・レンズ・三脚)、照明機材（ライト・バックスクリーン）の内容を把握した。ウェブ図鑑構築に向けて足りない機材を確認し、次年度の購入計画を立てた。新たな音声ガイドシステム「ポケット学芸員」が導入できた。

○事業目標３　みんなで学びあう博物館へ

・実施目標：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。

・評価指標：利用者が実施者になった多様な交流事業が実施される学びあいの場で情報交換が行われる

・内部評価

本年度は、提供している交流事業についての現状把握を行うことを重点においた。ニーズの多い交流事業についての調査と、新たな登録制度の必要性を検討するための他館の情報収集を行い、学校団体向けの体験型学習について、研修に参加した教員へのアンケートを行うなど、今後、多くの利用者が博物館の交流事業に参加していける仕組みや制度について、調査を実施した。

令和３年度は、今後の利用者が実施する交流事業やその展開を行っていくための交流事業の可能性について、検討を行うための調査を中心に行った。これについては計画どおり実施できたが、今後はそれに基づく検討と試験的な実施を進めていく必要がある。

・各重点事業の目標と実施状況

3-1．幅広いニーズに応える交流事業の充実

（実施状況）

交流イベントや地域連携事業に関する集計を行った。その結果、定着型イベントの屋外実施や受付方法やオンラインの導入などの工夫により、交流イベントへの需要が例年より高かった。また講師として依頼されるという連携・提供型ニーズが依然と高いことなどの現状の把握ができた。

3-2. 出会いの場の創出

（実施状況）

環境保全活動などに取り組んでいる市民環境団体、NPO、事業者などを「環境未来館登録団体」として登録し、活動紹介などを支援している「かごしま環境未来館」の登録制度の情報収集を行った。登録制度の要項、登録の条件・方法、登録団体（更新）申請書、宣誓書の様式、登録団体の支援内容の情報を収集した。

3-3.「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

（実施状況）

昨年度までの取り組みを見直し、プランクトン観察実習やワークシートを使った展示見学等、学習を進める現場の教師の要望に沿った研修を行った。事後アンケートでは、事前事後学習をどのように行うかを教員自身が再構築することができたという声を聞くことができた。来年度は、教員と継続的に連携をとりながらより充実した琵琶湖学習ができるような支援を行う。

○事業目標４　もっと使いやすい博物館へ

・実施目標：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます

・評価指標：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

・内部評価

各展示室において、最新情報を踏まえた展示更新を随時行い（年報 p31 － 37)、最新情報を踏まえた企画展示およびギャラリー展示の実施（年報 p41 － 51)、職員や地域の人による活動が来館者に見えるようにするため、オープンラボでの活動を推進した（年報 p38 － 41)。ICT の利用による展示室でのガイド「ポケット学芸員」の導入による展示に付随する情報へのアクセスの充実のための情報収集と、インターネット動画の配信によるフィールドへの誘いを進めた（年報 p93)。各展示室での今後の展示更新について担当から情報収集を行った。

令和３年度は、展示をより使いやすくするための情報収集に重点をおき、ほぼ計画通りに実施できた。今後は、最新情報への更新計画とその実施や ICT を使った情報発信のコンテンツ作成と、展示室内でのインターネット利用環境の改善など設備の充実の検討が重要である。

・各重点事業の目標と実施状況

4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

（実施状況）

インターネットを利用した展示解説補助ツール「ポケット学芸員」を導入し、その初期設定で利用できる文字による情報提供を試験的に行い、今後の使用範囲と実施計画に

ついて検討を行った。また、読み上げソフトと併用することで可能になる音声ガイドとしての利用ができるように、作業を進める計画を検討した。

4-2.「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長

（実施状況）

QR コード（二次元コード）を用いて琵琶湖博物館インターネットページで公開している「電子図鑑」や「おうちミュージアム」コンテンツ等へ接続することを一部展示で試験的に実施した。これらの方法を他の展示に設置していくために、今後は、展示を解説する補助ツールとして提示する情報およびインターネット上で公表するコンテンツを充実させていく必要がある。

4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

（実施状況）

C 展示室および水族展示室を中心に、2023 年までの短期的な更新計画、および 2030 年までの長期的な更新計画を収集した。また、全ての展示室で、小さな展示更新をいくつか実施し、あるいは準備した。

○事業５の目標　より多くの人が利用する博物館へ

・実施目標：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます

・評価指標：館内および館外からも利用がしやすくなり利用者が増える

・内部評価

博物館ウェブページの構成を整理し、学習用サイトのアクセスを行いやすいようにし、動画サイトに展示等の動画を作成した。開館以来行っている来館者へのアンケート調査を継続して行っている。はじめて来館の割合は多いが、4 回以上のリピーターも多く一定数いることがわかることなど現状把握をした（年報 p95 － 99）。キャッシュレス・チケットレスシステムの導入を行った。予約システムは、アンケート調査でやや不満が高まっている（年報 p98）ことから、利便性の高い博物館へは、現在の当館利用のシステムや社会インフラなどの状況を考えると、感染症対策の終了後には継続しない方がよい。

令和 3 年度は、ウェブページの構成整備により利用しやすいページづくりを実施し、計画の第一段階はできた。継続的アンケートの集計と考察を実施できたが、客観的評価手法の検討については、各事業における利用者の意見の集約と事業へのフィードバックの実施が課題であり、アンケート調査を継続しながら今後さらに進める必要がある。キャッシュレス導入などのインフラ整備は予定通り実施できた。

・各重点事業の目標と実施状況

5-1. ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

（実施状況）

来館者用サイトと研究・学習用サイト（リサーチアーカイブス）を統合し、さらに「学ぶ・調べる」というタブでまとめて学習目的でのアクセス機会を増やす工夫をし

た。インターネット動画共有プラットフォームの YouTube に「びわこのちからチャンネル」を創設し、展示概要、各展示室の 360 度動画、研究紹介動画を 4 本アップした。

5-2．双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

（実施状況）

現在行っている博物館での調査方法（来館者アンケート・認知度調査等）を継続的に実施し、現状分析を行った。今後現状分析を踏まえて、調査・評価方針の検討を行う。

5-3．来館しやすい環境の整備

（実施状況）

キャッシュレス・チケットレスシステムの導入が完了し 2 月 1 日より稼働した。予約システムについては確認作業などの人的なコストが大きいことからコロナ禍終了後には継続しないと判断した。

○事業６の目標　博物館の活動を安定して継続する

・実施目標：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます

・評価指標：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

・内部評価

老朽化した施設の点検等から修繕や改修の必要箇所のリストアップを一部行ったが、今後の修繕計画を立てるにはいたっていない。危機管理マニュアルの整備を行い、館内での共有を進めた。活動支援制度については、感染症対策の状況下で行いながら試行を継続しているが、仕組みの検討・実施は今後の課題と捉えている。

令和 3 年度は、施設管理についての過去の実績などの情報収集・整理が中心であった。マニュアル整備は情報共有、支援制度については社会状況もあり試行段階である。計画は順調といえるが、今後は施設の修繕の優先順位の検討や、社会状況をみながら支援の受入制度を模索するなど、継続的な活動が可能な仕組みづくりの検討を実施していく必要がある。

・各重点事業の目標と実施状況

6-1．老朽化した施設の改修と災害への備え

（実施状況）

点検や修繕等の実績に基づき要改修個所のリストアップを一部行ったが、優先度等の検討に必要な現況調査等が未着手。危機管理項目ごとに既存マニュアルを収集・整理し館内で共有できるようにした。

6-2．安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

（実施状況）

リニューアル後の支援の受入制度について試行を継続している段階である。2020 年度に引き続き、コロナ禍の厳しい中で外部資金確保の取組は行っているものの、仕組みづくりにつなげるところまでは至っていないのが現状である。

4　外部評価

○事業目標１　琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

・実施目標：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。
・評価指標：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

重点事業 1-1．世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進
重点事業 1-2．研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える
重点事業 1-3．研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

・外部評価（段落は各委員意見を示しています）

重点事業 1-1 について、科研費他の外部資金による研究ですが、研究代表者としてのテーマの獲得数からすると「基盤 C」と「若手 B」が多くなっています。これは若手研究者の努力を示しており、良いと思います。また、いくつかの財団基金による研究で代表者となっているものが 9 件と多いのも評価出来ます。しかし、研究代表者の「基盤 B」は 1 件、もっとも大きい「基盤 A」は分担研究が 1 件です。琵琶湖博物館の研究者が代表となるテーマで科研費「基盤 B」が文系と理系で、それぞれ一つは欲しいと思います。重点事業 1-2 について、研究成果の発表に関しては、内部評価は正当であると思います。重点事業 1-3 について、大型の研究機器の導入についての内部評価は良いと思います。出来るなら、この機器の活用を拡げる努力をしていただきたいと思います。共同研究で外部の研究者が使えるように制度を整えてください。あるいは、少し難しいとは思いますが、高校生などに「研究とはどういうものか」という教育活動に使えないでしょうか。大型機器の保持に関係してきますので、これは難しいかもしれませんが。

～～～～～

重点事業 1-1 に対して、10 年後の情況「琵琶湖やその周りの暮らしの価値を発見する活動を地域が盛んに行っている。」について、2022 年に計画を再構築するとのことですが、現在フィールドレポーターが活動しているような、市民参加型調査を基にした研究も盛り込むべきではないでしょうか。もちろん二つ目の情況「琵琶湖が世界中の研究者の注目の的となり研究プロジェクトが次々と生まれている」に対する計画も重要ですが、住民が主体となって行動することで地域での活動がなされていくため、そのための種まきも重要です。事業目標 3 にもつながりますが、学芸員が各地に出張し講座を開き、小さな子どもたちに科学や文化に興味を持ってもらうためのきっかけづくりをしてほしいです。もちろん現在行われている館内でのセミナーなども良い種になると思います。

～～～～～

事業目標 1 の実施目標は、「琵琶湖やその周りの暮らしの価値」を「地域の人々」や「国内外の研究者」とともに「発見し、その魅力を国内外に発信する」とあります。ウェブサイトの再構築や J-Stage での公開により、研究者からのアクセス増が認められ、一定成果があったことは喜ばしいことです。一方で、10 年後、「地域の人々」が「琵琶湖やその周りの暮らしの価値を発見するための活動を盛んに行う」まで到達するための具体の計画（その必要性）を、内部評価でふれておくべきではないでしょうか。高度で専門的

研究を牽引することは博物館の重要な使命で、琵琶湖研究にとって必要なことだと承知しています。しかし、地域住民にとって、総合研究や科研費研究は専門的でデータを分析し解釈することが難しいものが多い。よって、地域住民が、「研究」を「琵琶湖やその周囲の暮らしの価値」に結びつけるための具体的な方策が示されなければ、目標で終わってしまうのではないでしょうか。博物館は、それらの研究成果をもとに展示や図表で解説し、一般の地域住民にわかりやすく伝えるノウハウを持っておられます。今後、研究成果の情報発信は何を目的として行うのか、地域住民は発信された情報を何に、どのように活かすことを期待するのかまで明らかにしていくことが必要だと思います。

～～～～～

重点事業 1-1 について、後継総合研究の計画検討が遅れているとの自己評価ですが、進行中の大型プロジェクトの取り纏めの時期と重なっているので無理をせず、2023 年度までに十分な時間をかけて立案していただきたい。重点事業 1-2、1-3 については、目標設定、実施状況、自己点検ともに適切になされていると評価します。研究専念日（時間）の確保はユニークで先進的な取り組みですが、博物館での研究活動のあり方の探究も同時に進め、他の事業・業務と対立させることのないよう留意してください。

～～～～～

概ね内部評価と同様の評価と考えます。その中で気になる点について下記に挙げさせてもらいました。次の 10 年に向け「後継となる新な総合研究」をぜひ実現させてほしいです。「J―Stage」の活用は良い。多くの研究者の目に留まる機会が増えてほしいです。研究の質を高めるために予算確保は重要。その必要性を県（県民）とどう共有するのかを考え続けてほしいです。

～～～～～

内部表評価の報告書からは「より発信したい琵琶湖の魅力が何か」というものが読み取れなかったので記載があるとわかりやすいです。外部評価は良。他に、琵琶湖にはたくさんの魅力があると思うのですが、「魅力はこれだ」という大きく掲げるものがあると理解されやすいのかもしれません。事業目標が「魅力を掘り下げ世界に発信」なのですが、多くの市民や利用者は琵琶湖が国定公園だということも意識していません。研究者の方々の研究は大切なのですが、コロナ禍で発信された動画などを今後も進めていただき、研究者のお立場から、忙しいとは思いますが、市民が理解できる言葉での発信をお願いいたします。

～～～～～

重点事業 1-1 と 1-3 について、2021 年の年報を見て思ったことの一つに、共同研究や各分野における個人の研究の多さを知り、改めて研究専念日の重要性を感じました。重点事業 1-2 について、研究報告書の電子化 J－Stage での公開が開始でき、利用者が多かったことを評価致します。重点事業 1-3 について、新種発見等に繋がる電子顕微鏡購入の予算が得られた事は、今後の研究が加速することが期待でき、大いに評価致します。

～～～～～

重点事業 1-1 について、実施状況に「本重点事業については根本から再検討を行っているところである」と記述されています。一方、内部評価では、「1-1 は半分程度しか達成しておらず、その改善が課題として残った。」と記述されています。根本から再検討と

しているのに、半分程度達成というのはどういうことなのかと感じました。重点事業 1-2 については、実施状況からもかなり進行していると感じられます。情報内容の充実にぜひ取り組んでいただきたいです。重点事業 1-3 については、そもそも建物や設備の更新、研究機器の入れ替えということが事業なのかと疑問に感じています。研究の活性化ということで、「研究専念日」の設定は思い切った試みだと思います。課題等も記述されているが、その点はこれから改善していけるといいのではないでしょうか。

～～～～～

重点事業 1-2 について、HP の「学ぶ・調べる」が検索しやすく、大変充実しています。さらに多くの人にページの存在を知ってもらい役立ててもらえたらと思いますが、現在の告知方法は？学校の理科の授業や夏休みの自由研究にも多いに役立ててもらえそうです。研究調査報告の PDF ページ数や学習動画のトータルタイムが記載されているのも親切で利用しやすいと感じます。研究調査報告の閲覧数が格段に増えたとのことですが、どの地域からのアクセスが多いのでしょうか？

～～～～～

10 年後の社会目標に向け、研究成果等を国内外に広く発信していくことは非常に重要な取り組みであり、１年前倒しで、J-Stage に研究報告書の公開を開始したことは大変評価できます。研究成果を蓄積していくことが最も重要なことであるという観点から、全員一律の研究専念日を設定したことは、今後に生かせる改善だと思われますので、研究・事業専念日を厳格に運用する試行ができたことは大変評価できます。重点事業 1-1 について、根本から再検討を行っているとのことから、「1-2 と 1-3 については 100%以上達成したが、1-1 は半分程度しか達成しておらず、その改善が課題として残った」という内部評価は、適切だと考えます。

～～～～～

重点事業 1-1～1-3 の事業目標と評価につき、書いてあることについては全く異論はなく、今後も数年後の展示の礎となるような琵琶湖の生態系や環境史に関わるすぐれた研究が展開していくことを願っています。外部評価資料に同封された第 30 回企画展示「チョウ展」の展示解説書をみても、長きにわたる地域でのチョウの研究やはしかけの活動、収蔵資料の整理作業が基礎となり展示が成り立っていることや、自然史だけでなく養蚕に着目して文化的な側面にも触れていること、最後にフィールドへの誘いや図鑑があることなど、限られた紙面のなかで琵琶湖博物館の特徴がよく表れた構成となっていました。研究面について、事業目標では明示されていない領域にあえて踏み込むと、今回の外部評価の経緯とも関連して、研究部に設けられた３つの係のうち博物館学的な観点からの研究をより深めていく必要があるのではないかと感じました。もちろん長期間かけて実施を進めた展示リニューアルのなかで、博物館展示論に関わる論点は実践の場を得て、展示に十分に活かされていることは実感できるし、博物館教育論やメディア論においても琵琶湖博物館の継続的な取り組みが大きな意味をもつことは間違いないでしょう。今回の外部評価にあたり、「博物館を評価する視点」（琵琶湖博物館研究調査報告 17 号、2000 年）を再読しました。20 年以上前にこうした先進的なシンポジウムが実施されていたことに改めて驚くとともに、この頃から培われてきたノウハウは今回の内部評価や外部評価に生かされているのだろうか、という懸念が生じました。いまだ確立しては

いない「博物館の評価」において、博物館学がどのように寄与できるのか、実践する機会といえます。続いて「博物館を楽しむ　琵琶湖博物館ものがたり」(川那部編、2000 年)を再読し、学芸員さんの世代交代も進むなかで、ものがたりの続編「展示リニューアル編」を琵琶湖博物館での博物館学研究の成果として数年後に読んでみたい、という思いを抱きました。外部評価の一環としてここに書くことではないかもしれませんが、第三次中長期計画の後半に加えてほしい項目の一提案として付記しておきます。

～～～～～

世界有数の湖である琵琶湖を主要な活動舞台（研究及び展示活動）である琵琶湖博物館として、その活動の方向性は概ね評価できるものと言えますが、世界へ向けてとなると、まだまだ活動範囲は広がると思います。例えば、毎年とまでは言わないが、５か年ごとに世界の研究者を招聘して、湖沼についての会議を開催するなども一案かと考えます。大きな予算を必要としますので、様々な助成金を活用していく必要があり、大変かと思いますが、ぜひ実施に向けて動いていただければと思います。

～～～～～

目標に「世界に紹介」と掲げることに異議はありませんが、まずは足元固めが大切です。「滋賀県内⇒近畿圏内⇒日本」まずは、この順番に集中することです。滋賀県においても、周知・広報活動が不十分なところがありますので、地道なところから確実に、の進め方がよいかと思います。足元が固まり、その内容のレベルが高ければ、結果は自ずと広がっていきます。

～～～～～

湖から恩恵を受け、生計を立てている人たち（沖島にろう者がひとりいます）や湖の現在の課題、例えば外来魚による生態系の危機や藻の爆発的な繁殖などと正面から向き合い、解決しようと頑張っている人たちの姿もぜひ世界に発信して欲しいです。もちろん、素晴らしい琵琶湖ですが、一方では大きな課題を抱えている琵琶湖。どちらも日本最大最古の湖である琵琶湖の姿なのですから。

～～～～～

順調に研究を進められているとの内部評価はそれでよいと思いますが、琵琶湖の多彩な魅力を引き出す研究を継続的に実施していくためには、(プロジェクト型の研究の重要性は理解しつつ）それぞれの専門性を追求して検討していく専門研究、とくに博物館ならではの、時流に左右されたり競争にさらされたりするのではない地道な研究のさらなる充実が重要と考えます。そのためには、専門研究に割り振る研究予算を増加させるなどの対応も検討の一つだと思います。正直、年間の個人研究費が 6 万円／年というのは「いくらなんでも少ない」と感じました。いろいろ事情があることは理解しますが、せめて 20～30 万円くらいにはできないものでしょうか。博物館の魅力は、それぞれの専門性の分野の学芸員が楽しそうに新たな研究の話ができていることだと思うので、その雰囲気をつくるためにも、このような検討も一つの方向性として検討していただけるとよいと思います。

○事業目標２　資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

・実施目標：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICT を活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。
・評価指標：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

重点事業 2-1．標本・資料の管理体制の強化
重点事業 2-2．標本・資料の整理の推進と公開による利用促進
重点事業 2-3．ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

・外部評価（段落は各委員意見を示しています）

重点事業 2-1 について、これは評価できます。ある意味で当然の処置ですが。重点事業 2-2 は、年報 26 号をみますと、「動物標本」のデータベース化は未着手です。琵琶湖は固有種の宝庫、写真を含めた動物標本データベース作成の努力を期待します。重点事業 2-3 は、「2-2」が基礎になります。並行して進められることを期待します。

～～～～～

重点事業 2-2 について、ICT 化を進めることによって、多くの人が情報にアクセスできるのは大変すばらしいと感じます。しかし、生物のデータベースに関して、希少種の産地公開は避けたほうが良いのではないかと思います。産地を見て、乱獲する人もいるためリスクを伴うと感じました。また、無料でどこまでの情報を見せるのか、情報の取捨選択が必要かと思います。サービスによっては有料化し、収益化するのも手だと思います。

～～～～～

重点事業 2-3「ＩＣＴを活用し、だれでも、どこでも、いつでも使える博物館の創出」については、県民が博物館を身近に感じ、利用しやすい環境づくりという点で評価できる事業です。県内小学校等で活用されていた移動博物館の取組は、県内の小学生が博物館の標本・資料を活用しやすくする取組でした。今後は、ＶＲ技術を活用し、バーチャル博物館など多様な取組の創造を期待します。重点事業 2-1、2-2 に示されている「標本・資料の管理体制」、「標本・資料の整理の推進」についての内部評価を見ると、一般利用者としては、琵琶湖の自然環境、湖の周辺で営まれる人々の暮らしに関する貴重な標本・資料の管理状況、管理体制がこれまでどうであったかについて、より踏み込んで明らかにすべきだと思わざるを得ません。施設の老朽化に対する長寿命化工事の検討と管理組織の再編等による早急なデータベース化が必要なのではないでしょうか。いずれにしても、博物館のみで対応できることではないと思うので、県琵琶湖環境部等との連携のもとでの対応を願います。

～～～～～

各重点事業とも課題を的確に捉えて計画・実施されていると思います。資料の収集について、計画書には「特に収集は研究調査・展示等の活動に伴う収集を基本に、専門家、関係機関、地域の人々と協力を図りながら日々充実させていきます」と書かれています。重点事業には含まれていませんが、このテーマについても自己点検・評価が必要ではないでしょうか。

～～～～～

概ね内部評価と同様の評価と考えます。その中で気になる点について挙げさせてもらいました。事業目標１でも書いた通り、予算確保をどう進めるのか。（難しいのは承知していますが）例えば 3D スキャンによって資料をデータで残す、など日進月歩の技術を安価に利用していければ、と考えました。

～～～～～

内部評価の評価に異論ありません。外部評価としては、課題なども明確で優。国内外の美術館や博物館を訪ねた時、音声ガイドを借ります。実際、現地には ガイドの方もおられるのですが、自分の時間で回れることが音声ガイドの魅力です。導入されたことは感心できます。寄贈資料などを含め細かな整理は膨大な仕事だと推測できます。大変な作業ですが、ご尽力をお願いいたします。

～～～～～

重点事業 2-1 について、以前、博物館協議会の後、収蔵庫の見学があり、雨もりがあることを知りましたが、その後修理ができ、改めて、保管環境の大切さがわかりました。重点事業 2-2 について、画像データーベースの一部公開ができたことを評価致します。重点事業 2-3 について、音声ガイドシステム「ポケット学芸員」の導入は、来館者サービスの更なる向上につながり、大いに評価致します。

～～～～～

計画通りに順調に進んでいるように思います。重点事業 2-1 について、保管環境・作業環境の整備に順次取り組んでいく様子に安心しました。

～～～～～

開館から時間を経て、資料も増えていくなかで「整った環境」を維持し続けていくことの難しさは評価者も日常的に痛感しています。収蔵庫環境の維持管理にあたり、具体的な課題の洗い出しと改善を続けていくことは地味ですが、博物館活動の根幹にかかわってくる重要な事業であり、管理体制の強化を利用促進や ICT の活用という光が当たりやすい事業に先立って、重点事業 2-1 に据えたことは高く評価します。着実な実現と課題の解消を進めつつ、それが実は資料の利用促進と両輪となることを示していってほしいです。

～～～～～

標記の事業目標をいち早く取り組まれていることは高く評価できます。ただ、滋賀県は中世から自然科学的資料の収集や、民俗的資料の記録を多く残してきた地域です。琵琶湖博物館はそれらの資料を積極的に収集し、整理されていますが、まだまだ全容を把握するまでには至っていないと思います。さらに、県内各地域の小さな資料館や個人に所蔵される資料も含めて、センター館としてネットワーク化を推進してほしいと思います。

～～～～～

以前に収蔵庫に伺ったとき、担当の職員さんが、温度・湿度管理や菌管理（外部菌を入れない）に関して、「もっと厳重にやることはできるのですよ。ただ、どうしても限られた予算なもので・・・」との発言を聞きました。限られた予算は、周知のことです。「貴重な標本・資料」に関しては、専門ではないので、詳しくは分かりませんが、

予算がなかったので、「貴重な標本・資料」の劣化が進んでしまった。という状況にだけはならないで下さい。「貴重な標本・資料」は博物館の財産であり、守るべき内容として、基本中の基本に位置付けられるものです。予算要求の際、遠慮なく、進められるべき内容です。

～～～～～

小学生でもひとり一台タブレットを配布される時代ですから ICT に対する期待は大きいですが、アナログな部分も残しつつ進めていただきたいと思います。ICT を使いこなせない高齢者や障害がある方々、日本で滋賀で暮らす外国人の方々を置き去りにしないように分かりやすい文章表現や今もすでにしてくださっていますが、文字の大きさや色や言語も選べるような配慮なども研究していただきたいと思います。特に視覚障害の方も楽しめる配慮や工夫が重要と考えます。例えば、PDF は、NG であるとか、字体は明朝は NG。ゴシックは GOOD などなど。障害者のためにという古い福祉感ではなく、『誰もがやがては障害者』という発想の転換で基準を UD な考え方で進めれば、みんなが楽だと思いますので。

○事業目標３　みんなで学びあう博物館へ

・実施目標：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。
・評価指標：利用者が実施者になった多様な交流事業が実施される学びあいの場で情報交換が行われる

重点事業 3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実
重点事業 3-2. 出会いの場の創出
重点事業 3-3.「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

・外部評価　（段落は各委員意見を示しています）

重点事業 3－1 について、これは十分に良い評価ができます。重点事業 3－2 について、諸団体との連携は必要ですので、より一層の努力を期待します。重点事業 3－3 について、これに関する努力は大いに評価できます。できれば、何か刊行物にならないでしょうか。

～～～～～

交流事業の現状把握調査や情報収集の結果を整理し、多くの利用者が博物館の交流事業に参加できる仕組みづくりを期待します。重点事業 3-3「深く学ぶ力に基づく琵琶湖学習の支援」について、学校での環境学習を推進する上で、博物館が重要な役割を果たしており、評価できます。プランクトン観察学習やワークシートなどを活用して館内で調べ学習を進められるようにするなど、さまざまな工夫が積み上げられており、本県の環境教育の推進に大きく寄与しています。県内の小・中学生が、より琵琶湖を身近に感じ、ふるさと滋賀の豊かな環境を持続可能なものとする担い手となる意識を育んでいくことが求められています。今後、主体的で、標本や資料、博物館研究員や学芸員、スタッフと対話しながら深い学びにつながるよう、問題解決的な環境学習プログラムを開発するなどの一層の工夫を期待します。

～～～～～

計画書には「交流事業を再編する」と書かれています。琵琶湖に関する知的需要の拡大に応えるために、はしかけ、フィールドレポーター、フェスといった交流事業の枠組みの見直しに取り組んでいく方針であると理解しています。そのためには、これまでの事業の総括と課題抽出に時間をかけることが重要だと思いますが、その作業が年度計画に盛り込まれていません。現状把握や実施・受付方法の工夫などはむしろ日常的に取り組むべきことです。琵琶湖博物館では設立以来、博物館界では通常「教育普及事業」などとしているカテゴリーを使わず、「交流事業」という独自の用語を据えて利用者・市民との双方向性を重要視してこられました。そのことが実践の中でどのように定着し効果を発揮しているかという観点からも、この機会に点検してほしいと思います。

～～～～～

概ね内部評価と同様の評価と考えます。その中で気になる点について下記に挙げさせてもらった。「学びあう」には、「広く浅く」と「狭く深く」があると考えます。「狭く深く」を期待する人への計画が少し書かれていると良いと感じました。学校の教師への研修やニーズへの対応は大切だと思います。ぜひ今後も進めてほしいです。交流イベントなどは、滋賀の美術館が実施しているようなプログラムを参考にするのはどうでしょうか。他の博物館の情報を収集されているので、ぜひその方向で進めてほしいです。

～～～～～

内部評価について、全体的に異論ありません。重点事業 3-2 について、出会いの場の創出についてコロナ禍において出会いの場の創出は困難もあったかと思います。 滋賀には多くの活動団体があって、NPO センターなどでもあまり交流が深まらないので、いい方法を模索していただきたいです。外部評価は、調査などを実施してどうだったのかが不明良でわかりにくく、可。調査の実施は、アンケートの項目をつくり配布してレスポンスのデータ整理をする、という手間のかかることだと思います。集まったデータを活用してください。教員の方の要望である指導力向上も必要ですが、びわ湖学習の支援を行っている人のバックアップもしていただけるとありがたいです。

～～～～～

重点事業 3-1 について、屋外におけるイベントにプラスオンラインの導入等により、需要が高まったことを大いに評価し、今後のイベントの在り方に、随時新たな取り組みが期待されます。重点事業 3-2 について、「大阪自然史フェスティバル」のような賑わいのある「びわ博フェス」に進展していくことを期待し、かごしま環境未来館他さまざまな館より、そのヒントが得られるようなリサーチを期待します。重点事業 3-3 について、教師の要望にそったびわこ学習（体験型も含めて）の研修とアンケートにより、教師の声を聞くことができたことを評価致します。一方で、プログラムを提供する博物館側からも「びわこのちから」が発揮できるような新たなプログラムの作成を期待致します。

～～～～～

重点事業 3-1 については、特に、「連携・提供型ニーズが高い」という現状が把握できたということなので、そのことについて 2020 年度を含め、早期の取組を期待します。重点事業 3-3 については、小学校段階では県内の５年生が「うみのこ」という学習

船に乗って琵琶湖の環境等を学ぶ「フローティングスクール」が実施されています。可能ならば、フローティングスクールで学ぶ内容と違う学びや、あるいは発展した学びを博物館の方で仕組んでいただけるとよいのではないでしょうか。

～～～～～

情報収集を積極的に実施されたので、5 年計画の初年度としては順調なすべり出しだと思われます。

～～～～～

ニーズの多い交流事業についての調査や他館への情報収集を実施、研修に参加した職員へのアンケートを行うなど仕組みや制度への調査を多く実施しており、年度の計画に対する内部評価は適切です。一方で、10 年後の社会目標を持続可能なものにしていくために、交流事業の活性化は大変重要ですが、この事業目標３については、５年間の年度ごとの達成状況、達成に向け進めることが、とても緩やかなペースになっているように感じられます。10 年後に向けて、もっとスピードアップして進めてほしいです。例えば、団体向け登録制度に関して「かごしま環境未来館」から情報収集を行ったのは有意義ですし、10 年後に向けて第一歩を踏みだしたと思いますが、22 年度に予定している登録制度の発足準備も 21 年度に開始できたのではないでしょうか。予算や要員の関係があるのかもしれませんが、１年間かけて、１か所への取材だけで終わるのではなく、その取材結果や入手した新たな知見を生かして前倒しで次の段階に進められたのではないかと思います。また、教員が体験的な教材を主体的に生み出せる教員研修の確立も、10 年後の社会にとって非常に重要であるとともに、すぐにでも必要なこと、早めに確立させることだと思います。この目標を目指すにあたり、意識改革や効果測定も必要であり、それらが時間を要すことに繋がっているのかもしれませんが、創意工夫しながらもう少し前倒しで進めていくべきだと考えます。

～～～～～

琵琶湖博物館の活動のなかで大きな特色といえる交流事業について、現状把握とニーズの確認に基づきつつ、具体的で必要性の高い重点事業３つが設定できており、コロナ禍の影響もあったなか 2021 年度にも着実に実施できています。とくに 3-3 琵琶湖学習の支援、教員の養成、は将来的な波及効果が大きく望める事業であり、体験を重視した琵琶湖学習の進展につながることを保護者の一人としても願っています。将来的に「体験」のメニューや選択肢を増やしていくにあたっては、その背景に常に「研究」の裏打ちがあるように進めていくとよいと思います。ただ、冒頭の指標・目標にある「利用者が実施者になった」という表現は内容が伝わりにくいように感じました。「最初は利用者として交流事業に参加したが、しだいに担い手になっていくような深まりを生み出していく」ということでしょうか。

～～～～～

開館当初から、琵琶湖博物館は様々な分野で利用者参加型の博物館を目指して、多く「はしかけ」を実施されてきことは高く評価できると思います。学校現場との協業も徐々に進んできているように思います。ただ、滋賀県立ということが残念ながら足枷になって、滋賀周辺の府県（京都・大阪・岐阜・三重各県）との連携に課題があるように

思います。湖を大きな対象とした琵琶湖博物館のような施設は他府県にはないわけですから、是非とも中高等教育施設と連携する取り組みを行っていただきたいと考えます。
～～～～～
　子供さんから大人向けまで、様々な「学びあい」の企画が用意され、かなり進められていると思います。全部の内容を知っている訳ではありませんが、対面、ズーム等、そのやり方は日々進化していると思います。乗り遅れないよう、更なる充実を期待しております。
～～～～～
　県内の校種ごとに活用の工夫や課題を話し合う場を設けてもいいのかなと思います。別館の活用などの啓発も兼ねて県下順次。そのような関係性を持った上で、活用していただいた時の改善点などもやり取りをして改善することができたらいいなぁと思います。改善し続けるのが UD のキーワードですので。
～～～～～
　交流事業を含めたイベントについて、ニーズを捉えた実施内容を検討されるのはよい方向だと思います。ただ、そのことで交流事業が肥大していくことを心配します。年間のイベント開催件数は 150 に近かったと記憶しているのですが、控えめに言ってものすごい数だと思います。それ自体は悪いことではないにしても、博物館の魅力の根幹である研究のための時間を圧迫していないか、またイベントのためのイベントが多くなって個々の事業への「思い入れ」が薄まる結果になっていないか、心配です。ニーズを捉えた事業を精査することや、博物館への支援者が中心になって行う事業の展開によって、学芸員の交流事業以外の事業をすすめるための時間の確保についても同時に検討されることを強く望みます。

○事業目標４　もっと使いやすい博物館へ

・実施目標：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます
・評価指標：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

重点事業 4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長
重点事業 4-2.「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長
重点事業 4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

・外部評価　（段落は各委員意見を示しています）
　重点事業 4－1 について、「ポケット学芸員」の検討は良いと思います。実際に可動できることについて、さらなる努力を期待します。重点事業 4－2 について、「観る＋使う」展示は良い企画です。琵琶湖の「実際のモノ」に結びつくコンテンツを選ぶ努力をしてください。重点事業 4－3 について、数年前に、新種タニガワナマズの展示を拝見しました。このような、琵琶湖博物館の研究成果を「一般に公開」する展示を増やしていただければと思います。また、その成果を「ブックレット」で普及させてください。
～～～～～
　より使いやすく、最新情報を備えた展示更新が適切になされ、来館者の評価も高いです。また、ICT を活用した情報提供ツールやインターネットでの動画配信など、来館者

が標本や資料に多様な方法でアクセスできる方策が構築されてきており、評価できます。特設展示等も定期的に更新され、常に新しい情報を発信していただいている点も評価できます。小・中学生段階の子どもたちが、琵琶湖の自然環境や湖周辺の文化や伝統、生活や生活の素晴らしさに気づき、主体的に保全や伝承に取り組むことの大切さを認識できるよう、情報提供や情報コンテンツの発信に期待しています。子どもたちは、学校の校外学習やフローティングスクールで利用した後も「また琵琶博に行ってみたい」と思い、学校に配布される琵琶湖に生息する魚のポスターを眺めている子どもも少なくありません。子どもたちの興味や関心を育む工夫もお願いしたいです。今後も、最新情報への継続的な更新とコンテンツ作成、展示室内でのインターネット環境の整備等、令和３年度の課題を整理し、常に成長する展示として発展させていただくことを期待します。

～～～～～

各重点事業ともに意欲的で年次計画に基づいて順調なスタートを切っていると評価します。引き続きウェブコンテンツを充実させてください。「展示から現場の情報・より詳しい情報をとりに行く行動を促す仕組み」については内容をイメージしにくいので、より簡潔なネーミングがあればと感じました。

～～～～～

概ね内部評価と同様の評価と考えます。

～～～～～

内部評価の記載に自己評価としてよいのかどうかがわかりにくいのですが、「検討が重要である」との末尾より考えれば、内部評価としては課題が残っているのでしょうか。「実施目標」に対しては、おおむね進展していると思われます。外部評価としては、事業の進捗や今後の必要事項も明確で、優。ICT への取り組みは重要ですが、今後のインターネット環境は必須です。 経費負担はあると思いますが、工事など工夫をお願いします。

～～～～～

重点事業 4-1 について、オープンラボでの活動が頻繁に利用されたことは、来館者から見ると、「博物館の見える化」により、博物館がより身近に感じられ、大いに評価致します。重点事業 4-2 について、C 展示室および水族展示室の更新計画の情報収集は、成長していく博物館として来館者の期待する所であり、大いに評価致します。

～～～～～

重点事業 4-2 については、「QR コードを用いて琵琶湖博物館インターネットページで公開している『電子図鑑』や『おうちミュージアム』コンテンツ等へ接続することを一部展示で試験的に実施した」と記述されていますが、反応はどうだったのか知りたいところです。「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長はその通りだと思います。今後は、例えば VR などの技術を使って、「模擬体験できるコーナー」などができてくるといいのではないでしょうか。

～～～～～

重点事業 4-2 について、QR コードの連携により展示の奥行きが広がり理解や興味も増すので、時代に合った有効な手法だと思います。博物館を出た後も探求が続くよう、ぜひさらに発展させて欲しいです。
～～～～～
令和３年度は、情報収集や検討、小規模な試行実施で、「ほぼ計画通りに実施できた」という内部評価は適切です。
～～～～～
展示のリニューアルが一段落してそれで終わり、ではなく、「常に成長する展示」を目指していく姿勢は非常に好感が持てます。今後もそうした真摯な姿勢を貫いてほしいです。
～～～～～
この事業では「最新情報を得ること」が「現場への興味」へとどのようにつながっていくかが重要になってきます。「観る＋使う」展示への成長、という目標とも密接に関わってきて、まずは魅力的なコンテンツを増やしていくことが課題になります。さらに、それがフィールドへの入口となるためには、「情報」と「実際の現場」をつなぐようなステップをいくつか設定し、具体的な導線を複数の動画や展示のなかに入れ込んでおくような仕掛け作りも有効でしょう。
～～～～～
先年から大型の展示替えが実施され、より充実した展示になったと思います。ただ貴館だけではなく＜自然＞の展示ではもどうしても手狭感は拭えません。この問題は自然史系の博物館の大きな課題です。バーチャルやフィールド観察を多用するなどの工夫が必要になりますが、これも人数や環境から制限が生まれてしまいます。今後この課題に対してどのような対応が可能なのか、模索していただければと思います。
～～～～～
以前に今森光彦さんが撮った琵琶湖の生き物たち、そしての琵琶湖水系・・の NHK の番組を見たことがあります。一見、地味と言われる生き物たちの生きる力のダイナミックさ、壮大な物語を感じることができました。地味は地味なりに発信のやり方等で、「入口」としての展示から、そのファンを拡大していく方法はいくらでも見つかると思います。派手なものより、地味な中での光るものを見出す。この姿勢が、くらげの鶴岡市立加茂水族館のような変容があるかもしれません。
～～～～～
目標と評価指標が抽象的で分かりにくい。来館者の推移や改善につながるアンケートの項目を検討して実施してはどうか。障害別でもいいかもしれません。

○事業５の目標　より多くの人が利用する博物館へ

・実施目標：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます
・評価指標：館内および館外からも利用がしやすくなり利用者が増える

重点事業 5-1．ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介
重点事業 5-2．双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映
重点事業 5-3．来館しやすい環境の整備

・外部評価　（段落は各委員意見を示しています）

重点事業 5-1 について、YouTube の活用は良いと思います。ただ、事業として重点事業 4-1 と区別がつきにくいと思います。重点事業 5-2 について、「来館者アンケート」と「認知度調査」の継続と検討、大いに評価出来ます。重点事業 5-3 について、これについて特に意見はありません。

～～～～～

重点事業 5-1 について、現在 YouTube などの SNS を使った情報発信が行われていますが、ソーシャルメディアポリシーなどを作成し、SNS 上で起こりうる様々なトラブルを回避する必要があると考えます。また、バーチャルミュージアムを作成する際、どこまで見せるのか、深く検討する必要があると思います。すべてを見せて解説してしまい、視聴者に満足感があると実際に来館することは減ってしまうのかもしれません。ミュージアムショップやレストランなども含め琵琶湖博物館の魅力だと思うので、視聴者や利用者の反応を見ながらうまく発信していってほしいです。

～～～～～

各重点事業目標と実施状況から、博物館の社会的・教育的価値付けを行うための取組が進んでいることは評価できます。今後は、現在の取組を推進しつつ、博物館の社会的評価を行うための評価指標を明確にして、事業内容の精選と、工夫・改善を図る必要があります。

～～～～～

ウェブサイトの改良やキャッシュレス・チケットシステムの導入などが計画通り（以上）に順調に進捗していることがわかりました。予約システム非継続の判断も適切だと思います。調査・評価手法の見直しと再構築に取り組まれるとのことで、今後に期待します。協議会によるこの評価の位置付けも明確にしてください。

～～～～～

概ね内部評価と同様の評価と考える。その中で気になる点について挙げさせてもらいました。ICT の事が多く書かれていましたがあくまでツールであり、SNS や口コミ、広報など「訪れてみたい」と思わせる内容を深めてほしい。アクセスに関して、乗用車以外のアクセスが難しいのが現状かと思います。県で進めている「自転車活用」をタイアップしてみるのはどうでしょうか。

～～～～～

内部での評価が高い項目だと感じました。予約のシステムの継続についてはコロナ禍の課題であり、今後は解消も見込めると感じます。今後も引き続きご尽力をお願いいたします。外部評価も、内部評価に従い、優。

～～～～～

重点事業 5-1 について、「びわこのちからチャンネル」の創設は、好奇心と知識欲を満足させる企画的な取り組みで、琵琶湖博物館がより身近に感じられ、今後、大いに評価致します。また、「学ぶ、調べる」はアクセスしやすく、工夫されたことを評価致します。

重点事業 5-2 について、定期的なアンケートの実施は、来館者と共に歩む琵琶湖博物館としては、今後も継続していくことを期待致します。
～～～～～
　重点事業 5-1 については、学習目的でのアクセス機会を増やす工夫をしたり、各展示室の 360 度動画や研究紹介動画を複数本アップしたりするなど、取組を進めていることがよく伺えました。
～～～～～
　重点事業 5-3 について、アンケート結果による予約システムの不満を受け、当日キャンセル待ち枠を設けてはどうでしょうか？基本的に事前予約制ですが、予約ナシで来館した場合も、コンサートのチケットのようにその時間帯に「空き」がある場合に限り、特別枠で先着順に入館が可能とする。ただし、空きがゼロの場合もあります。お店の混雑状況がリアルタイムで分かるように、博物館の混雑具合が分かると、利用時間帯を分散でき、コロナ禍でも利用者増にもつながるのではないでしょうか？
～～～～～
　多くの人が琵琶湖の魅力を知るために、そして琵琶湖と共生することの価値を感じることが出来るようになるために、いつでも誰でも博物館を利用しやすくなることは大変重要です。ウェブの世界はどんどん進展しており、目標達成に向け、事業目標４と同様、多角的な視点を持って創意工夫しながら力を相当傾注し取り組んでほしいです。琵琶湖博物館の HP（インターネットページ）は、非常に多岐に亘る項目をきちんと整理して掲載していて、見やすく、わかりやすく、利用しやすいです。360 度動画など大変面白い。「びわこのちからチャンネル」は、ユニークで情熱のある学芸員によって、琵琶湖の魅力や琵琶湖とともに暮らす人々の生活のリアルさが存分に伝わってきます。琵琶湖の魅力を知るために、そして後世に伝えていくためにもとても良い企画だと思います。ウェブの整理やアンケートなどの内部評価は適切です。予約システムについては、コロナ禍終了後は継続しないと判断したとのことですが、コロナ感染の収束がなかなか見通せないのが現状です。一方で、博物館利用者の利便性やシステム、人的負担を考慮すると、予約システムは早期にやめた方が良いと思われます。屋外ではありますが、Ｊリーグでは、スタジオでの観戦者が、(マスクを着用しての）声を出して応援することの試行を一部開始しています。コロナ対策の専門家に相談し、予約をしないで、感染防止策を徹底しながら博物館への入館、鑑賞する試行を実施してもよいと考えます。
～～～～～
　「利用しやすい博物館」という目標には異論がないとして、事業目標１で述べたことと関連させると、重点事業 5-2 の「博物館の情況を客観的に評価するための調査・評価手法の検討」にあたっては、事業評価というやや行政的な側面だけではなく、博物館学的な視点からの評価手法を導入・確立していくように模索することも有効ではないでしょうか。
～～～～～
　博物館活動を入館者数だけで評価してきたこれまでの評価軸に対して、多様な評価軸を見出そうとするこの評価事業が新しい試みとして注目されるもので、高く評価できると思います。

～～～～～

「事業目標３みんなで学びあう博物館へ」と「事業目標４もっと使いやすい博物館へ」に重なるテーマですが、伝達媒体の進化は目まぐるしいものがあり、そこには常にアンテナをはり、最新でしかも効果がある方法を取り入れる必要があります。あとは中味ですが、私見ですが、今森光彦さんの琵琶湖の NHK の番組で感動をしました。ということは、一見、地味と言われる生き物たちの生きる力の中には、感動を引き出すものはたくさんある、ということです。その感動が伝われば、人々には自然と伝播します。派手なものより、地味な中での光るものを見出す。この姿勢が、くらげの鶴岡市立加茂水族館のような変容があるかもしれません。

～～～～～

誰もがアクセスしやすく、検索しやすいということを話の真ん中に、当事者の意見も聞きながら進めていただきたい。博物館に出向かわなくても、楽しめるものがコロナ禍の中、間違いなく進んだと思いますので、他府県や他館の取り組みもリサーチして欲しいです。

○事業６の目標　博物館の活動を安定して継続する

・実施目標：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます
・評価指標：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

重点事業 6-1．老朽化した施設の改修と災害への備え
重点事業 6-2．安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

・外部評価　（段落は各委員意見を示しています）

重点事業 6-1 について、以前から申し上げていることですが、博物館の玄関付近の状態です。小川は水が枯れて打ち捨てられ、その周囲の植物は乱雑です。これ、なんとかならないのでしょうか。再整備すれば、印象がよくなると思います。重点事業 6-2 について、これは、頑張ってください、としか言えません。

～～～～～

危機管理マニュアルの共有や外部資金確保の努力にご苦労いただいています。素晴らしい博物館施設、収集されている学術研究標本や資料を次代に残すため粘り強く取り組んでいただきたい。やはり予算が必要な項目であるので、博物館の社会的・教育的・学術的価値を明確にし、県民の理解のもと早急な対応が望まれます。老朽化への対応、耐震化等の災害対応について、専門家によるアセスメントはできているのかを明らかにすべきです。小・中学生が施設を利用しているときの災害訓練を自治体や近隣の学校と連携して実施し、マニュアルを定期的に見直すなどの災害策をお願いしたいです。

～～～～～

リニューアルが一段落して、施設の整備・改修についてあらためて必要箇所の洗い出しを始めておられるということで了解しました。2022 年度には現場として中長期的な改修計画を策定とのことですが、その実現のためには、計画に対する設置者（県）との合意形成が重要課題になるので、年次計画上の位置付けなども必要ではないかと思います。博物館施設における危機管理の分野は多岐にわたっているので、統合的なマニュアルを

作成するという方向性に賛成します。外部資金による財源の安定化を目指しているようですが、県からの予算措置と外部資金との関係性やバランスをどのように考えておられるのか、目標も含めて明確にされたい。館のウェブサイトの「びわ博サポーター」のページには現在もリニューアルへの寄付金のお願いが掲載されています。2022 年度からサポーター制度の見直しを進めるとのことですが、とりあえずの対応ができていないのではないでしょうか？

～～～～～

概ね内部評価と同様の評価と考えます。その中で気になる点について挙げさせてもらいました。事業目標１、２でも書きましたが、予算確保があってはじめて安定継続が成ると考えます。昨今の異常気象の被害など新たな想定も必要となるため、ぜひ必要性を訴え続けてほしいです。一般市民に近い（分かりやすい）事業の予算に関しては「クラウドファンディング」も一案かと考えます（例：法隆寺の修繕など）。ただ、（全ての項目に関わりますが）クラウドファンディングに挑戦することで職員の手間がかかり研究や通常業務が滞ることは本意ではありません。

～～～～～

内部評価では、今後に課題が残るようです。課題が明確化されているのでよいのではないでしょうか。今後も、老朽化の修繕対策や外部資金の確保などの課題に対して、取り組んでいただきたい。外部評価は、内部評価でも課題が残るため、可。外部資金の調達について多くの人が知っている琵琶湖博物館ではありますが、資金を調達するには、その資金使途の明確化が人の動向に影響します。何にどれくらい必要なのかを打ち出して、民間や個人の賛同を得やすくし、資金調達に活かしていただきたいです。

～～～～～

重点事業 6-1 について、気候変動により災害が起きる確率が格段に高くなってきているため、早急に現状調査を進めていただきたいです。

～～～～～

「計画は順調」となっていますが、一方で、「現地調査が未着手」や「仕組み作りまでできていない」とあります。事業目標 3 と同様、事業目標 6 についても、5 年間の達成する状態（目標）や進めることが、緩やかなペースになっているように感じます。災害に耐えられるような資料の保管環境を実現する改修を優先的に進めるとのことですが、達成状況などをみると、あまり危機感が感じられず、緊急性がないと理解すればいいのでしょうか。重点事業 6-2 の目標も、行政手続きは 2023 年度にならないと進められないのでしょうか。「博物館の活動を安定して継続する」ための、活動基盤となる施設・設備や運営資金は非常に大切であり根幹だと思いますが、この計画からは、その必要性があまり伝わってきません。とても重要な目標であり、もっと時期を早めて進めていくべきだと考えます。

～～～～～

安心・安全が各方面で求められるなか、災害対策や危機管理体制の見直しなどは普段から必要なことで、まず改修を視野に入れた建物・施設の点検を進めていくのは確かに重要なことです。しかし、博物館活動の肝である標本・資料の保管環境整備が二の次になっている（ように事業計画上は見えてしまう）ことは問題で、災害時の文化財レスキ

ューや自然史資料のレスキューが毎年のように各地でニュースになっている現状を踏まえると、標本にも危機が及ぶことへの備えは常にしておく必要があります。重点事業 6-2 で支援を受ける仕組みの確立に向けて事業計画として最後にしっかり明示されていることも重要なことで、広報と総務が両輪となって効果的に進めていくことが望まれます。
～～～～～

厳しい言い方になりますが、滋賀県の場合、博物館に対する行政的評価が定まっているとは決して言えません。日本列島を逆立ちさせたような滋賀県は、歴史的・文化史的・自然史的にも特異な位置にあることを行政に理解させる必要があります。この意味で世界的に知られた琵琶湖を活動の中心に据えられている貴館の役割は非常に重要なものと考えられます。他府県からの評価や世界からの評価をもっと喧伝する必要があると思います。
～～～～～

「事業目標２資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備」にも重なるテーマです。「貴重な標本・資料」の維持は最低限なこと、予算がなかったので、「貴重な標本・資料」の劣化が進んでしまった、という状況にだけはならないで下さい。予算要求の際、遠慮なく必要な額は要求して下さい。それが、安定運営につながる一つの方法です。同時に問われるのが「自ら律する力」です。予算要求に頼らずに自らの力で、安定運営につなげる方法は、上記の「事業目標５より多くの人が利用する博物館へ」のテーマ内容を地道に積み上げるしか方法はないと思います。今は、クラウドファンディング等の方法もありますが、公共施設では、難しいです。公共施設でも行えるクラウドファンディング的なものを見つける必要もあるかもしれません。
～～～～～

より多くの方々の来館を望むなら、まずは安全性の確認や来館者が利用者が不便はないか？！例えば、ドアなどの開閉は子どもでも高齢者でも障害者でもスムーズにできるかなどの観点で、常に近くにいてくださる展示交流員さんから声をあげてもらえるようなシステムを持っていただきたい。私が、一番気になるのは、授乳室のブラインドが折れていて危険であること（もう修繕してもらっていたらごめんなさい）と障害者用おトイレのドアが重いことです。館内を満喫していただくためには、赤ちゃん連れのママが、また誰もが使いやすいトイレかどうかで決まると思います。今や、大型商業施設やスーパーでさえも、居心地のいいおむつ替えコーナーや授乳室、おトイレや化粧室に力を入れています。

5　事業計画の見直し

重点事業について計画の見直しをした結果を示します。文字に線が入っている部分が削除する部分で、ゴチック体の文字が追加した部分です。

【事業目標１】琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

・実施目標：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。

・評価指標：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

・修正検討事項：現在の総合研究の計画変更、J-STAGE への登録が先行して行ったこと、ウェブコンテンツの具体的な計画策定、研究備品の具体的な整備案の追加などによる変更を行った。

1-1. 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

・5 年間の事業：既存の研究プロジェクトのとりまとめと新しい複合分野の研究プロジェクトの立ち上げを進める。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	各年次報告書提出	総合研究・基盤B研究の推進 次期総合研究の検討開始
2022	**古代湖である琵琶湖の生い立ちと固有種の進化に関する新たな知見が蓄積**（基盤 B）~~最終報告書提出~~	~~総合研究の推進~~ 基盤 B 研究のとりまとめ **総合研究の実施（継続）** 次期総合研究の内容・体制の検討
2023	**過去 150 年間の琵琶湖と人の関係の変化についての知見が蓄積** ~~総合研究最終報告書提出~~	総**合**研**究の実施（継続）**~~「過去 150 年」とりまとめ~~ 次期総合研究**の内容・体制の検討**~~研究計画調書提出~~
2024	**過去 150 年間の琵琶湖と人の関係の変化に関する研究成果のとりまとめと公開** ~~新総合研究年次報告書提出~~	**総合研究の成果報告の作成と企画展の実施** 新総合研究の立ち上げ**準備**
2025	**新総合研究と共同研究群による新たな取り組みの開始**~~館内において複合分野の研究プロジェクトが企画、実施されている。~~	新総合研究の実施

1-2. 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

・5 年間の事業：ウェブを中心とした新たな研究発信方法の構築とコンテンツの充実をはかる。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	リサーチマップの掲出と更新 **J-stage への研究調査報告掲載**	既存の枠組みでのウェブ発信 **J-stage への研究報告書掲載手続き**
2022	**コンテンツ案策定**	**ウェブ掲載コンテンツの検討**

	~~J-stage への研究調査報告掲載~~	J-stage への研究報告書を順次掲載（以後略）~~手続き~~
2023	論文解説の掲載開始 ~~コンテンツ案策定~~	論文解説ページの整備と掲載 琵琶湖に関する紹介ページの内容検討 ~~ウェブ掲載コンテンツの検討~~
2024	琵琶湖に関する紹介ページの掲載開始 ~~新コンテンツのウェブ掲載~~	琵琶湖に関する紹介ページの整備 ~~新コンテンツのウェブ掲載~~
2025	琵琶湖地域に関する研究成果が、順次発信される体制が構築されている~~ウェブを中心として適切な媒体によって国内外に発信されている。~~	新コンテンツの検討~~改良~~

1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

・5 年間の事業：耐用年数を超えたり故障した研究備品を更新し、共同利用を推進する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	最新の備品更新計画策定	備品更新計画の更新。既存の施設備品による研究推進
2022	・微小生物の分類に関する体制が整う（電子顕微鏡） ・希少種保全施設としての整備が進む（共同研究） ・順次備品が更新される ~~備品調達方法のリストアップ~~	・大型備品①電子顕微鏡の調達 ・生物多様性共同研究による希少種保全の 施設環境整備 ・DX 事業への参入挑戦 ・その他備品類の予算要求への反映 ~~備品調達方法の検討。既存の施設備品による研究拠点形成の検討~~
2023	・さまざまな資料の内部を非破壊観察する体制が整う（軟 X 線検査装置） ・希少種保全の取り組み（生態観察池改良・孵化飼育設備改良）が進む（共同研究） ・先端デジタル技術を活かした研究手法が開発される（DX） ~~備品調達方法の改善。既存の施設備品による研究成果の公開~~	・大型備品②軟 X 線検査装置の調達 ・生物多様性共同研究の実施 ・DX 事業を活かした研究の実施 ~~備品調達の試行。既存の施設備品による研究拠点形成~~
2024	・琵琶湖での観測体制継続（調査船） ・希少種保全の取り組み（生態観察池改良・孵化飼育設備改良）が進む（共同研究） ・DX 事業を活かした研究の成果が蓄積（DX） ・大型備品を利用した琵琶湖の共同	・大型備品③調査船の更新 ・生物多様性共同研究の実施 ・DX 事業を活かした研究の実施 ・大形備品の共同利用の推進 ~~必要備品(電子顕微鏡や調査船)の確保。既~~

	研究の芽が生まれる ~~大型備品の確保~~	~~存の施設備品による共同利用の推進~~
2025	~~琵琶湖~~研究**環境整備と共同研究の推進による研究の活性化**~~に必要な研究設備が整備される~~	新規~~購入~~備品**等を活用した共同利用**~~使った研究の促進。共同利用~~の推進

【事業目標２】資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

・実施目標：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICT を活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

・評価指標：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

・修正検討事項：予算削減により、事業目標 2-1 については大幅な戦略的後退を余儀なくされている。収蔵庫の空調が予算の関係で修繕できない、機械室の設備が不調で不完全燃焼の防止のためにドアを開放されるようなことがあっては、最低限の温湿度管理も IPM も覚束ないので、そうならないことを最低限の目標に定めた。外部予算獲得による事業の推進計画をたてた。

2-1. 標本・資料の管理体制の強化

・5年間の事業:開館から25年が経過し収蔵庫の保管環境や作業環境が悪化しているため、計画的に改善を図るとともに、IPM による管理体制を強化する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	収蔵庫空間の設備の不具合の原因が把握できている	収蔵庫空間の電気、空調、排水設備等の故障や老朽化の情報集約。民俗収蔵庫1の雨漏りの原因究明と修繕。
2022	問題のある設備改修の予算申請の年次計画を立案。**空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新がなされている。**	収蔵庫空間の電気、空調、排水設備等の故障や老朽化の一斉点検。収蔵庫空調用冷水バルブ修理／蛍光灯の安定器故障による照明器具の LED 改修予算の要求。
2023	収蔵庫空間の IPM 体制の問題点が把握できている。**改修工事により改善された環境。空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新がなされている。**	**IPM 体制の問題点の情報集約。環境改善に向けた予算申請。積み残しの問題のある設備改修の予算申請。**予算がついたものの改修工事。**空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新**
2024	IPM 体制**が改善されている**。改修工事により改善された環境。**空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新がなされている**	**環境改善に向けた予算申請。**予算がついたものの改修工事。積み残しの問題のある設備改修の予算申請。IPM 体制の改善案を検討。**空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新**

2025	再構築された IPM により定期的な管理体制が確立**している**。改修工事により**収蔵庫環境が安定している。空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新がなされている**	予算がついたものの改修工事。積み残しの問題のある設備改修の予算申請。収蔵庫環境の管理体制の構築。**空調および熱源設備の適切な維持管理および消耗品の定期的かつ適切な更新**

2-2. 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

・5 年間の事業：従来より進めてきた収蔵品データベースへのデータ入力を引き続き行うとともに、画像データが付加され**ウェブ図鑑と連動し**たより魅力的なデータベースとなる。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	ウェブ公開データベースの充実に向けたデータ入力が進む	緊急雇用による資料撮影と新規登録
2022	ウェブ公開データベースの充実に向けたデータ入力が進む	資料写真整理体制の検討
2023	資料写真整理とデータベースへの登録が進む。ウェブ公開のための体制が整備される	資料写真整理体制の整備 データベース編集作業、データベース画面デザイン、**ウェブ図鑑との連携、博物館ウェブページとの調整**
2024	データベース運営における問題点の抽出と改善方法の検討	データベース運営における問題点の検討
2025	データベースがスムーズに運営されている	データベース運営における問題点の改善

2-3. ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

・5 年間の事業：リニューアル後の常設展示資料情報に対応したウェブ図鑑の公開を進める

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	写場の設備計画の立案 多面的な音声ガイド情報が公開	写場の設備の現状把握 多面的な音声ガイド情報の整備
2022	写場の設備**更新が始まる**~~が整えられている~~ **3D コンテンツを含む**ウェブ図鑑の構築に向けた資料の画像情報（**3D コンテンツを含む**）の蓄積が進む	写場の設備を更新 ウェブ図鑑の構築に向けた資料の画像情報の蓄積
2023	**写場の設備が整えられている** **リニューアル後の常設展示資料情報が整理されている** ウェブ図鑑の構築に向けた~~資料の画像情報~~**写真、動画、3D コンテンツ**の蓄積が進**み、一部が公開される**~~む~~	リニューアル後の常設展示資料情報の整理
2024	**リニューアル後の常設展示資料情報の公開方針が決定している**	リニューアル後の常設展示資料情報の公開**方針を策定する**~~における問題点~~

	写真、動画、3D コンテンツの蓄積と、ウェブ図鑑**としての公開が進む** ~~の構築に向けた資料の画像情報の蓄積が進む~~	~~の改善~~ **ウェブ図鑑の構築に向けた写真、動画、3D コンテンツの蓄積** **ウェブ図鑑公開システムの追加公開**
2025	リニューアル後の常設展示資料情報と連携したウェブ図鑑の公開	リニューアル後の常設展示資料情報の公開における問題点の改善

【事業目標３】みんなで学びあう博物館へ

・実施目標：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。

・評価指標：利用者が実施者になった多様な交流事業が実施される学びあいの場で情報交換が行われる

・修正検討事項：試験的実施と見直し検討の年次計画の追加、団体の登録制度をびわ博フェスへの参加をメインにした計画案を検討し、体験型研修プログラムの開発は、琵琶湖博物館だけで完結しない方向性での計画を検討した。

3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実

・5 年間の事業：利用者との対話を通じて交流事業のニーズを確認しながらメニューの充実を図る。また、交流事業の実施者の多様化を促進する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	琵琶湖博物館全体の交流事業の現状が把握される。	これまでの交流事業の実績を他の係の実施分も含めて整理し、現状を把握する。
2022	交流事業の充実のための計画や方針が策定される。	博物館が提供できる(すべき)交流事業の候補をリスト化し、さらにびわ博フェス等でニーズの確認を行う。その結果をもとに交流事業の充実のための方針を策定する。
2023	**次年度以降の**計画的なメニューの充実が進むとともに、実施者の多様化も進む	交流事業の充実のため、~~学芸職員や~~はしかけ、外部団体等**が主体となって実施する**~~に声かけや相談をして~~メニュー**の企画**~~作り~~を**実施内容に沿った担当学芸職員と相談しながら**進める。また継続的にニーズ調査を行う。
2024	~~計画的な~~**多様な実施者による**メニュー**が試験的に行われ、課題が改善される**~~の充実が進むとともに、実施者の多様化も進む~~	~~交流事業の充実のため、学芸職員や~~はしかけ、外部団体等**が主体となった**~~に声かけや相談をして~~メニュー**の実施とその改善を行う**~~作りを進める。また継続的にニーズ調査を行う。~~
2025	交流事業が充実するとともに、実施者も多様化する。	館内外の人びとと共に、~~これまで~~5 年間の交流事業の実践を検証する。

3-2. 出会いの場の創出

・5 年間の事業：フィールドレポーター制度やはしかけ制度およびそれらの出会い・発表の場であ

るびわ博フェスを基盤に、~~参加する~~**利用者**層**の**~~を拡充し~~多様性**や連携性**を高めることで目標を実現する。最初の 5 年間は団体・企業等の参入を促すため団体向けの「はしかけ制度」的なものを作る。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	登録制度の概要についての整理	団体向け登録制度に関する情報収集
2022	制度運営に必要な要項**が**~~等の~~整備**される**	団体向け登録制度**の詳細内容を検討し、要項を定める**~~発足の準備~~
2023	~~登録開始、利用実績作り。拡大~~びわ博フェス**への参画者層と実施者層の多様性が図られる**~~開始~~	~~団体向け~~登録制度**を活用した**~~の開始。~~びわ博フェス**の実施を通じて、双方にとっての課題整理と制度の見直しを行う**~~への団体の参加~~
2024	~~登録~~**多様化した**団体の**参入により、新しい**~~拡充と利用実績の増大。拡大~~びわ博フェス**の開催や交流事業における新たな連携や交流が進む**	**より改善された登録制度を通じて、カテゴリー別に増やした多様な登録**団体**とともに、**~~の勧誘。~~**新しい**びわ博フェスの~~計画・~~運営**と企画などを行う**~~方式の検討~~
2025	~~さまざまな個人と団体が博物館を利用して活動を行い、人々の~~**多様な**出会いの機会が増**え、交流事業の新たな可能性を見出せる**~~加している~~	**様々な個人と団体が博物館を利用して活動や連携の機会を増やし、新しくなったびわ博フェスを中心に団体登録制度や運営の見直しを行う**~~交流状況についての効果測定とまとめ~~

3-3.「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

・5 年間の事業：「深く学ぶ力」による学習では体験が重視されるが、琵琶湖学習においては教師自身の「体験」の機会が少なく有効な教材を生み出しにくい問題がある。この問題を解消するため、研修によって教師自身の「体験」を支援する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	教師が「体験」的な教材を生み出すために役立つ研修の構築	研修内容の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集
2022	受講者の意識向上を指標に**研修が**改良され**る**~~た研修の実施~~	研修の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集（**以後、実施**）
2023	受講者**自身が体験を重視した学習プログラムを展開できる**~~の意識向上を指標に改良された研修の実施~~	**学校現場の実態を把握しながら、受講者に助言を行う**~~研修の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集~~
2024	受講者**が自ら発案した体験学習プログラムに改良を加え実施し、他の教員と共有する**~~の意識向上を指標に改良された研修の実施~~	**改善されたプログラムの実績を収集し、改善前のプログラムと比較検討をする**~~研修の見直しと試験的実施。事前・事後・1 年後アンケート効果測定と実践例収集~~
2025	~~教員が~~体験的な教材を主体的に生み出**すことができる受講者が増加**	**受講者からの評価を受け、5 年間の実践を検証する**~~研修の継続的な実施。研修の成果まと~~

	し、他の~~せる~~教員**も体験的学習プログラムを実施することができる**~~研修の確立~~	~~め~~

事業目標４：もっと使いやすい博物館へ

・実施目標：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます。

・評価指標：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

・修正検討事項：現在の音声ガイドが令和 4 年度で使えなくなるため、別の方法で実施する計画へ変更し、利用者の利用状況の検証などデータ収集と検証を計画に追加した。予算削減に合わせた展示行進計画の見直しを検討するように変更した。

4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

・5 年間の事業：視覚障害者と外国語使用者への対応として音声ガイドを導入したが、その性能上、一部の展示しかカバーできていない。最初の 5 年間はこの問題に取り組むこととし、可能な限り多くの展示へのアクセシビリティを確保するため、新たな ICT 技術を用いたガイド手法を導入する。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	採用する手法の候補が決まる	ガイド手法についての情報収集
2022	展示室においてテストが行われ、実現性や課題が明らかになる	ガイド手法の試行
2023	新しい手法によるガイドの**内容が検証され、より拡大した使い方**~~数が増え、その効果について~~の検討が行えるようになる	新しい方法に合わせた**常設**展示解説の**内容について内部で検討、さらに追加・拡大の計画を策定**作成と配置開始
2024	効果測定に基づく改良と解説項目の増加が進む	**展示解説の作成と配置開始、および**解説の追加・改良**、小規模な効果の検証（評価）**
2025	常設展示室の展示の大半に解説がつき、アクセシビリティが向上する。	解説の追加、改良。利用者による評価

4-2.「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長

・5 年間の事業：展示室から現場の情報にアクセスすることでより展示を楽しむ仕組みを、インターネットの利用により実現する。外部から展示室を利用する方法については重点事業 5-1 で展開し、6 年目以降に両者を活かしたプログラム作りを進める。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	方法の検討と小規模な試行	方法の検討と小規模な試行
2022	展示から現場の情報・より詳しい情報をとりに行く行動を促す仕組みについて情報が得られる。	博物館から現場の情報を取得する仕組みを一部の展示を使って試**し、展示室外の情報へのアクセス数などを検証**~~す~~
2023	展示から現場の情報・より詳しい情報をとりに行く行動を促す仕組みが強化さ	博物館から現場の情報を取得する仕組みを試す範囲を拡げる**と同時に、取得する情報**

	れる。	**の内容を精査**
2024	展示室から外の情報にアクセスすることでより展示を楽む利用方法が来館者に認知されるようになる。	博物館から現場の情報を取得する**内容について検証し、必要な情報のブラッシュアップおよび追加を行う**~~楽しみについての PR~~
2025	展示室と現場をつなぐ楽しみ方の認知が広がり、一般に利用されるようになっている。	仕組みの充実

4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

・5 年間の事業：常設展示の情報の見直しと修正**を検討し、予算が削減された状態でも可能な展示更新を実施、今後の大規模更新に備えて準備を行う**~~リニューアルが終了した時期の早いものから順次進め、5 年間で一通りの更新を実施する~~

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	C 展**示**・水族**展示**の更新計画	C 展**示**・水族**展示**の更新計画を策定
2022	C展示・水族展示の**小規模な**更新~~の一部実現。大型更新のための予算要求提出~~	経常予算でのC展示・水族展示の更新**、予算規模に合致した更新計画の見直し**~~。予算措置が必要な更新の予算編成~~
2023	C 展示・水族展示の**小規模な**更新、**C展示・水族展示の大型更新のための予算要求提出**~~が完了。A 展・B 展の更新計画~~	C 展示・水族展示の**小規模な更新、予算措置が必要な更新（一部）の予算編成**~~大型更新の実施。A 展・B 展の更新計画を策定~~
2024	**C展示・水族展示の更新の一部実現。**A 展示・B 展示の更新**計画**~~の一部実現。大型更新のための予算要求提出~~	**C展示・水族展示の大型更新（一部）の実施、**~~経常予算での~~ A 展示・B 展示の更新**計画を策定**~~。予算措置が必要な更新の予算編成~~
2025	**C展示・水族展示の更新の一部実現、**A 展示・B 展示の更新**の一部実現。A展示・B展示の大型更新のための予算要求提出**~~が完了し、常設展示の更新の 1 サイクル目が終了している。~~	**展示・水族展示の大型更新（一部）の実施、経常予算での** A 展・B 展の~~大型展示~~更新。**A展示・B展示の予算措置が必要な更新の予算編成**~~次のサイクルの進め方の検討~~

【事業目標５】より多くの人が利用する博物館へ

・実施目標：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。

・評価指標：館内および館外からも利用がしやすくなり利用者が増える

・修正検討事項：先行して実施した事業があったこと、予算削減による状況などを検討項目として、計画の見直しを行った。環境整備については、来館しやすいという

ことの意味も含めて議論をしていく。

5-1. ICT を活用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

・5 年間の事業：ウェブサイトを「もう一つの琵琶湖博物館」（バーチャルミュージアム）と位置づけ、サイトだけでも琵琶湖（湖と人間）について学べるように情報を発信する。また、展示室のようすや展示解説も掲載し、疑似的な来館を実現する。最初の 5 年間は枠組みづくりを中心に進める。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	発信計画の素案ができる。ウェブサイト改良の第一段階が終了。展示紹介動画ができ、公開される。	発信計画の検討。ウェブサイト再編成（サイト統合）。博物館紹介動画（展示概要））作成。**ウェブサイト再構成。博物館紹介動画作成。**
2022	**地域の人の発表した内容が公開される。**~~発信計画ができる。発信準備としてページの再編成が進む。~~	**びわ博フェスでの発表内容紹介ページの作成。研究発信解説ページの作成。**~~発信計画（ページ構成案）策定。ウェブサイト再編成（ページ整理）。博物館紹介動画（トピック）作成。~~
2023	**琵琶湖の概要情報の発信ページできる。博物館で新たに明らかになったことがわかりやすく発信される。**~~各メニューの掲載が始まる。~~	各ページのコンテンツ作成、掲載開始。琵琶湖紹介動画の計画。アクセス解析**を実施**~~開始~~。
2024	アクセス解析により、アクセスを増やすためのルート改善が進む。	アクセス解析およびページの改良。コンテンツ掲載継続。琵琶湖紹介動画作成。
2025	ウェブサイト上で「湖と人間」について学べるようになっている。また琵琶湖博物館の疑似的な来館が可能になっている。	発信計画のみなおし。琵琶湖紹介動画アップ。アクセス解析。

5-2. 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

・5 年間の事業：琵琶湖博物館の社会貢献を測定し、事業に活かせるような仕組みを運営できる組織体制を確立する

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	博物館の情況を客観的に評価するための手法、目的や指標の検討を行う	調査･評価方針の検討
2022	博物館の情況を客観的に評価するための調査･評価手法を選定する	調査･評価方針の検討
2023	**来館状況などの変化や傾向を理解し、展示利用の来館者の傾向を把握する。**~~調査が行われ、評価結果が出るとともに当初の目的に適合するかどうかの検討が行われる~~	**過去のアンケート調査結果の見直し調査。予算を伴わない調査・評価方法の検討。**~~調査の実施~~
2024	**展示以外の事業についての部分的な評価が理解され、その改善方針が検討される。**~~必要~~	**展示以外の利用についての調査・評価方法の検討と一部実施。結果**

	~~に応じて改善された調査が行われる~~	**から改善について検討**~~調査の継続実施（改善含む）~~
2025	~~調査評価の方法が確立し、~~博物館の情況を客観的に示せる~~ようになっている~~	**評価の実施と改善の検討。開館 30 周年に向けて来館者動向の変化解析。**~~調査の継続実施（改善含む）~~

5-3．来館しやすい環境の整備

・5 年間の事業：予約システムによる来館者の分散は 2020･21 年度実績より現実的でないと判断。キャッシュレス･チケットレス環境は前倒しの整備となったため、2022 年度をもって終了予定。ほかに想定される、多言語対応やユニバーサルデザインの推進は事業目標4にて実施する。公共交通機関の充実については、前中長期計画の取組結果より、期間を区切って結果を達成するのは極めて困難と判断し、継続的に模索するものの、重点事業化はしない。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021		予約システムの活用方法の検討。キャッシュレス･チケットレスの導入
2022	キャッシュレス･チケットレス導入による利便性の向上	利用実績に基づくキャッシュレス･チケットレスの対象会社の拡張
2023	**駐車場から博物館への道について修正方針が定まる**	**駐車場から博物館までの道について、来館しやすい道への修正の検討。博物館にとっての来館しやすい環境とはなにかの議論**
2024	**来館しやすい環境のソフト面について一部が改善される**	**来館しやすい環境としてソフト面で改善方法の議論と実施**
2025		

【事業目標６】博物館の活動を安定して継続する

・実施目標：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます。

・評価指標：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

・修正検討事項：資金調達方法の検討を行う年度計画を追加した。

6-1．老朽化した施設の改修と災害への備え

・5 年間の事業：「災害に強い」を重視し、災害に耐えられるような資料の保管環境を実現する改修を優先的に進めるとともに、危機管理体制の見直しを行う。

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021	改修･危機管理の改善に向けた準備	改修更新個所の洗い出しと分類。危機管理項目の頭出しと既存マニュアルの再収集･整理
2022	改修更新計画。危機管理マニュアル	建物･施設改修更新計画完成。危機管理管理マニュアル統合版完成
2023	施設改修の進捗。危機管理体制整備の進捗	標本･資料の保管環境整備開始。危機管理のための体制整備着手、訓練･研修計画作成

2024	施設改修の進捗。危機管理体制整備の進捗	標本・資料の保管環境整備継続。建物関係の改修・更新開始。マニュアルに基づく訓練・研修
2025	計画に基づいた建物・施設の改修が、優先順位の高い標本・資料の保管環境から進んでいる。危機管理マニュアルが職員に浸透している	標本・資料の保管環境整備継続。建物関係の改修・更新開始。危機管理マニュアル改訂作業開始

6-2. 安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

・5 年間の事業：支援の受入制度の整備と安定化をまず実現する

年度	達成する状態（目標）	進めること
2021		リニューアル後の博物館支援の受入制度の試行
2022	びわ博サポーター制度を利用しやすくするための検討が進む	支援の受入制度の課題の抽出と最適化のための検討
2023	制度の改善のために必要な行政手続きが進められる	最適化のための手続き **企業・団体・個人等の賛同を得られるような資金調達方法の調査・検討**
2024	改良された制度が始まる	支援の受入制度の運用開始
2025	企業・団体・個人等から支援を受ける仕組みが確立している	支援の受入制度の運用